小さな命の意味を考える

第2集 宮城県石巻市立大川小学校から未来へ

あなたの大好きな学校の
教室 廊下 校庭 体育館
風にそよいでた桜の花びら
空に向かってこいだブランコ
絵本といっしょに
バスを待っていた図書室

あの笑顔を忘れない
あの歌を忘れない
あの思い出を忘れない
あの悲しみも忘れない

「行ってきます」
あの朝の
いつもと同じ風景を
忘れない

泥だらけの教科書を
洗って干して

編集：小さな命の意味を考える会／大川伝承の会／一般社団法人Smart Supply Vision

ご挨拶

未来をひらく

2011年（平成23年）３月11日の東日本大震災の津波で、石巻市立大川小学校では全校108名中、74名の児童が死亡あるいは行方不明となりました。教員も10名が亡くなっています。

108名といっても当日欠席、早退、保護者が引き取りに来た児童がおり、最終的に校庭にいた児童は70数名で、４名だけが奇跡的に助かりました。教職員も助かったのは１名だけです。学校管理下で、このような犠牲を出したのは大川小学校以外にありません。大川小より海に近い学校はもちろん、もっと海から遠い上流の学校や保育所も逃げています。

震度６という強い揺れが３分も続いた後、大津波警報が発令され、防災無線やラジオ、市の広報車がさかんに避難を呼びかけていました。その情報は、校庭にも伝わっていて、子どもたちも聞いていました。体育館裏の山はゆるやかな傾斜で、椎茸栽培の体験学習も行われていた場所です。迎えに行った保護者も「ラジオで津波が来ると言っている。あの山に逃げて」と進言しています。スクールバスも待機していました。そして「山に逃げっぺ」と訴える子どもたち。

校庭で動かずにいる間に、津波は北上川を約４km遡り、堤防を超えて大川小を飲みこみました。15時37分、地震発生から51分、警報発令からでも45分の時間がありました。子どもたちが移動を開始したのはその１分前、移動した距離は先頭の子どもで150mほどです。なぜか山ではなく、川に向かっています。ルートも狭い民家の裏を通っています。しかも、そのまま進めば行き止まりの道です。

時間も情報も手段もあったのに救えなかった、危機感を感じていながら「逃げろ」と強く言えなかったのはどうしてかを議論しなければなりません。どうして組織が機能しなかったのかです。あの日から、自分自身に言い聞かせている、重い重い言葉です。

守るべき命、しかも守ることが可能だった命を守れなかった事実から目を背けてはいけません。警報が鳴り響く寒空の下、校庭でじっと指示を待っていた子どもたちに耳を澄まし、目を凝らすのです。誰も悪意をもっていたわけではありません。でも、救えなかった、それはなぜか。先生方は、黒い波を見た瞬間「ああ、○○すればよかった」と後悔したはずです。その後悔を無駄にしてはいけません。

学校だけではなく、私たちの周りにある様々な概念、価値観、システムを見直すことは、東日本大震災で、現代社会が突きつけられた宿題のような気がします。その宿題は、情報や物が氾濫する一方で、多忙感、閉塞感が蔓延し、本質的な豊かさが失われつつある我が国の方向性にも影響を与えるほどの意義をもつように思います。子どもたちの命を真ん中にして、誠意をもって向き合えば、はじめはかみ合わなくても必ず道は見えてくると私は今も信じています。

大川小学校の校歌には「未来を拓（ひら）く」というタイトルがつけられています。大川小は、始まりの地です。もう一度、命の大切さやよりよい学校のあり方を確かめる場所であるべきです。小さな命たちが、未来のための大切な意味を持てたとき、私たちの向かう方向で、あの子たちがニコニコ笑っている気がします。

（2015年3月14日 第3回国連防災世界会議にて）

小さな命の意味を考える会 代表、大川伝承の会 共同代表、スマートサプライビジョン 理事　佐藤 敏郎

大川小学校には、連日多くの人が訪れます。

「随分寂しい場所に学校があるんですね」現地で、そう聞かれたことがあります。石ころだらけの空き地に、ポツンと壊れた校舎、初めて来た人は「なんで何もないところに学校が」と思うでしょう。でも、ここは、かつて家が立ち並んでいた場所なのです。

子どもたちが走り回っていた校庭、
一輪車で遊んで、
　　お花見をしながら給食を食べた中庭、
扇型の広い教室、学芸会では体育館は満員で…。
みんな大好きな大川小学校。私の娘も笑顔で通った。

倒れてスロープみたいになっているのは
　　ガラス張りの渡り廊下、
体育倉庫にはハードルや運動会の用具が
　　今もしまってあるのが見える。
絵が描いてあるのは野外ステージのフェンス、
その脇にあった
　　屋根付きの相撲の土俵や掲揚塔は跡形もない。

あの日は卒業式一週間前の普通の日でした。

多くの子どもが地域から突然いなくなった悲しみと衝撃は、どんな言葉でもうまく言い表せません。しかも、学校管理下で起きたかつてない規模の事故でもあります。メディアも、限られた字数、時間枠で、前例のないこの状況をどう伝えたらいいか苦悩してきました。時としてセンセーショナルな部分が独り歩きして、意図が伝わらないことや、存在しないはずの「溝」が生まれることもあります。報道は小さな窓です。その向こうに広がる景色を想像できるよう、伝える方も受け取る方も努力しなければといつも思います。

私たちは、取材や案内の依頼は、できるだけ対応することにしています。多くの人が知るべきだし、覚えていてほしい…。反面、その記事や番組を誰にも見てほしくない、忘れてほしい気持ちもどこかにあります。でも、なかったことにはしたくありません。あの出来事に、あの命たちに意味づけをしたいと思っています。「悲しい」「かわいそう」「悲惨」だけではなく、願わくは、ほんの少しでも未来につながる意味づけを。

小さな命の意味を考える会は2013年11月に発足し、あの日起きたことについての検証・伝承・想いを多くの皆さんと共有したいと考え、活動を続けてきました。

時々「命って小さいのですか？」と質問を受けます。命は、地球がちょっと身震いしただけで簡単になくなる小さく弱いものだとあの日に思い知らされました。でも、その意味は大きく、重く、深いことも知りました。これほど大切なものはありません。

2015年3月、声をかけていただき、仙台で開催された第3回国連防災世界会議で大川小についてのパブリックフォーラムを企画したところ、想定の100名を大きく上回る約320名の方に参加いただきました。その際配布したメッセージ集が「小さな命の意味を考える」第１集です。以後少しずつ加筆しながら、約７万人の方にお配りしました。

この度全面的に改訂し、第２集ができました。より踏み込んだ考察、多くの方々の想いの詰まった内容となりました。大切な人や好きな風景を想いながらお読みいただけたらと思います。

ご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（2019年4月）

ご挨拶 逢いたい 抱きしめたい

大人になった愛娘に逢いたい、抱きしめたい。
「行ってきます」の声は聞いたけど「ただいま」の声は聞いてない。
会えたけど無言のまま。
無言のままで成人を迎え大人に…。

あの恐ろしかった東日本大震災から年月は過ぎ、被災地は「復興」が進み、
かつての暮らしの面影が無い、新しい街が出来ているように感じます。

石巻市立大川小学校がありました。
その地域にはたくさんの人々の暮らしがありました。
その学校には、かけがえのない何よりも大切な命がありました。
そこで失ったものは忘れられるものではありません。
大川小学校で起きたこと、
地震発生から津波襲来までの51分間、
大勢の子供たちと先生方が学校管理下で命を落とした事実、
震災当日、翌日から捜索作業で、あの地獄と化した場所で我が子を探したこと。
何人もの子供たちを抱き上げた事実。
土砂の中から足が、手が、頭が…。
顔についた土を取ってあげて泣きながら我が子を抱き上げたこと。
親子として12年間を過ごした日々。

辛く厳しく悲しい思いは薄れることなく突き刺さったまま年月が過ぎますが、
一生付き合って行かなければならないものと覚悟を決めています。
それが娘と親子として付き合って行くことなのかと感じています。

大川伝承の会 共同代表　**鈴木 典行**

ボロボロになった大川小学校校舎。
震災遺構として遺すことになった大川小学校校舎。
今後の学校防災・防災教育のための学びに来ていただきたいし、利用していただきたく思います。

私は伝承者として語り続けていきます。
大川小学校で何があったのかを。
被災した校舎を見ていただき、案内を聞いて感じていただきたく思います。
未来のいのちを守れるように伝承活動を継続していきたいと強く思っています。

震災遺構は永遠には保存できませんしいつかは崩れます。
いずれは崩れ落ちるものだとは理解しています。
崩れても心の中にある大川小学校は永遠に崩れることはありません。

（2019年4月）

大川伝承の会

宮城県石巻市の大川地区は東日本大震災で大きな被害を受けました。大川伝承の会では、あの日まで確かにあった大川の風景、生活、命を風化させない活動をしています。

2015年発足。2016年12月から定期的な語り部ガイドを始めました。小さな命の意味を考える会とは、語り部ガイドで本冊子を使用したり、それぞれの会の活動を同日に実施して希望者が参加しやすくしたりするなど、協力しあっています。

2017年には、大川小学校跡地に案内看板を設置しました。大川小学校だけではなく長面地区（海側の地区）も案内します。また、大川地区のジオラマや大川小の校歌「未来をひらく」も紹介します。卒業生の若者も語り部として参加するようになりました。

2019年9月には、大川小学校を紹介するリーフレットを作成し、見学者などに配布しています。2020年4月には英語版も作成しました。

語り部ガイドのスケジュール等はFacebookで告知しています。

（語り部ガイドについては、本冊子のP55、P67でもご紹介しています）

大川伝承の会 Facebook
www.facebook.com/ookawadensyo/

早朝の大川小学校。
小鳥のさえずりが何故か心を癒します。
山から、そして校舎内から
子どもたちが遊んでいるような小鳥たちの声。
しばらく校舎前に立っていれば誰かが出て来そう。

スズメの写真を撮ろうと思っても
すばしっこく動いて撮れない。
子どもと同じだ。

2015.05.31

小さな命の意味を考える

第2集 宮城県石巻市立大川小学校から未来へ

目 次

ご挨拶 …… 2

大川小学校と周辺ガイド …… 7
2011年３月11日 14時46分から15時37分まで …… 10

石巻市教育委員会の事後対応 …… 14
大川小学校事故検証委員会 …… 18
大川小学校津波事故訴訟 …… 28

全国からのメッセージ …… 36

旧大川小学校校舎の保存と伝承 …… 52
勉強会・座談会 …… 58
あの日の校庭から「未来をひらく」 …… 60

リンク集 小さな命がつながる …… 63
一般社団法人Smart Supply Visionについて …… 64
小さな命の意味を考える会について …… 66

宮城県石巻市立大川小学校

1873（明治6）年　桃生郡釜谷小学校として開校
1985（昭和60）年　大川第一小学校と大川第二小学校が統合され
大川小学校となり、現在残されている校舎が完成
2011（平成23）年３月11日　東日本大震災の津波で被災
2018（平成30）年３月31日　閉校

3.7km
海から大川小までの距離

1.1m
大川小の海抜

校門脇にあった碑、
海抜1m12とある▶

108名
当時の全校児童数
（校庭にいたのは77～8名と
言われている）

74名
犠牲になった児童数
（死亡70、行方不明4）
（2024年1月現在）

9度
毎年3月にシイタケ栽培の
体験学習を行っていた
大川小裏山の傾斜

10名
犠牲になった教職員数
（校庭にいた11人中）

51分
14:46〈地震発生〉から
15:37〈津波到達〉までの時間

津波で止まった時計▶

1分
津波から避難した時間
山ではなく川に向かった

8.6m
大川小を襲った津波の高さ
（海抜9.7m）

◀2階教室の天井に
津波の跡がある

150m
先頭の子が
避難開始から移動した距離

追波（おっぱ）運動公園
震災直後は自衛隊の活動拠点になった。野球場などはその後仮設団地になった。

川向の町・飯野川の**河北総合センター（ビッグバン）**は避難所になった。元々多目的に活用できる施設ということもあり、避難所としても機能的であった。

山の上の石巻北高校飯野川校の体育館は**遺体安置所**…。
学校の体育館は
避難所か安置所になった。

福地閘門を閉めたので、福地地区には津波が到達しなかった。学校にいた子どもだけが亡くなった。
3月11日は、この閘門より下流方面は通行止めとなった。

谷地地区は水が入り込み、
富士沼とつながり、
湖のようになった。

大川第二小学校跡
1985年に大川第一小学校と統合。現在は資材置き場、ゲートボール場になった。
校歌碑が建っている。

大川中学校は
25年3月に閉校。
跡地が野菜工場、
ソーラー発電所に
なった。（良葉東部）

路側帯は大川中の生徒が
登下校で使う自転車道路。
大川中が閉校した今、
ここを通る中学生の姿はない。
そこで生活する人も風景なのだ。

間垣地区
大川中から新北上大橋のたもとまで堤防が決壊。立ち並んでいた家はほとんど残らなかった。

新北上大橋
1976年に完成、全長567m。
津波で橋の約4分の1が流失。

三角地帯
子どもの遺体が並べられていた。
信号機より高い波が襲った。

長面（ながつら）・尾崎（おのさき）地区
海に面した集落、
海水浴でにぎわった。
現在も漁港がある。

校　　門			震災後、自然に祭壇になった。
アッセンブリホール（多目的室）			じゅうたん敷きで 集会や作品展示などが行われていた。
教　　室			元々は2学級で使用。 学級減により間の壁をはずし、 半分に机を並べ、半分はワーク・展示スペースとして 広々と使っていた。（1階は1・2年生）
中　　庭			一輪車で遊んだり、 お花見をしたりいろいろな活動をしていた。 大川小のほとんどの子たちは一輪車に乗れる。
渡り廊下			海側へ倒れていて、 川から巨大な波が襲ったことを示している。 ガラス張りでモダンな作りだった。
体 育 館			ステージの両脇と、 出入り口だけが残った。
野外ステージ			コンクリートの反響板は倒れている。 壁画にある「未来を拓（ひら）く」は大川小の校歌のタイトル。 隣に相撲場もあった。

大川小学校 —— 2011年3月11日 14時46分から15時37分まで

地震発生後、校庭に避難し点呼。津波が迫るまで校庭待機。
校庭からの移動時間は約1分。民家裏の細道を通り、津波が来る川に向かった。

14：46 **地震発生** 震度6 約3分間 体験したことのない強い揺れ。

14：49 **校庭避難** 校舎から出る際、先生が「津波が来る、山に逃げるぞ」と声をかけ、山に向かった児童もいたが、校庭に整列することになった。

14：52 **大津波警報**（防災行政無線）

控訴審判決 この時点で避難すべきと判断できた ※判決の詳細は、p28～30をご覧ください。

スクールバスには会社から「子どもを乗せて避難」という無線が入り、すぐ出られるように待機していた。

15：00頃 地域の人や迎えに来た保護者が山への避難を進言。児童も「山に逃げよう」と訴えたが待機が続き、焚火の準備をしようとしていた。

15：25～30 市の広報車が高台避難を呼びかけながら通過。

第一審判決 この時点で避難すべきと判断できた

15：32 津波が富士川の堤防を越流。

15：36 **移動開始** 山ではなく三角地帯（橋のたもと）へ避難することになり、自転車置き場の脇の狭い通路から校庭を出た。民家裏の細い通路を通ったが行き止まりだった。15時35分に車で家を出た近くの人が学校前の県道を通ったとき、児童はまだ道路に出ていない。移動した距離は先頭の子で約150m。

15：37 **学校に津波到達** 新北上大橋に流木やがれきが堆積し一気にあふれた。その後、陸を遡上した津波も到達。校庭で渦を巻いた。

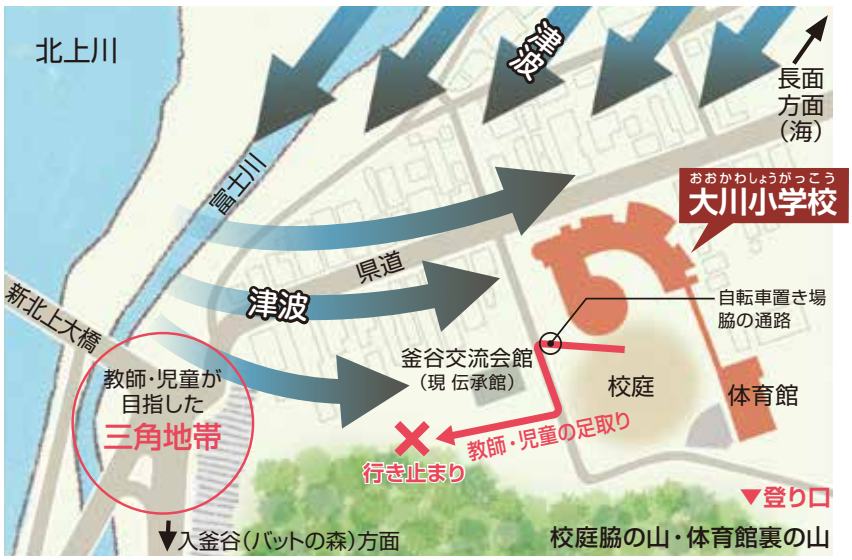
子どもたちがすり抜けた自転車置き場の脇の通路

幅約70cm、一列でしか通れない。全員がここを通過したところに津波が襲った。

校庭側から

校庭の外側

現在はこのように色を変えて示してある。



津波は、家、車、土砂、そして海岸にあった数万本の松等を巻き込んで、北上川を遡ってきた。それらが新北上大橋にへばりつき、流れをせき止め、一気にあふれ出た。
せき止められた分、津波は高さも威力も大きくなった。橋は4分の1ほど流失、堤防も決壊。
その後、陸を遡上してきた津波も到達した。校舎内の時計は、すべて15時37分で止まっている。

『津波から命を守るために——
大川小学校の教訓に学ぶQ&A』より（一部改変）

学校のすぐそばには緩やかな山

「山は急で登れなかった」「倒木のため登れなかった」と思い込んでしまっている方がまだまだ多いようですが**「すぐそばの緩やかな山」は大前提となる事実です**。体育館裏の山は傾斜が緩やか（９度）で、簡単に登れます。毎年３月に、児童がシイタケ栽培の体験学習を行っていた場所です。

あの日も子どもたちは「山に逃げよう」と訴えました。迎えに来た保護者も「先生、山に逃げて」と指さしました。地震で倒れた木は一本もありません。

現地を見て「ここは登れないね」と言う人は一人もいません。多くの人が、近くにこんな緩やかな山があることに驚きます。校庭脇には授業で登っていたコンクリートのたたきもあるし、数百メートル歩けば全校で植樹をしたバットの森もあります。

体育館裏の山　2009年まで毎年3月にシイタケ栽培の体験学習が行われていた。傾斜は9度。マラソン大会のコースのすぐ脇。

校庭脇の山　崩れないように土留めをし、コンクリートのテラスのようになっている（5~6m幅で70m以上）。低学年の授業でも使っていた。校長先生はここから何度も写真を撮影している。

バットの森　アオダモの木を全校で植樹した山。

山があるだけでは命を救えない

大川小の校庭には命を救うための「時間・情報・手段」が揃っていました。つまり、この３つは命を救う条件のすべてではないのです。どんなに緩やかな山が目の前にあっても、山がエレベーターになるわけでも飛行機になるわけでもありません。

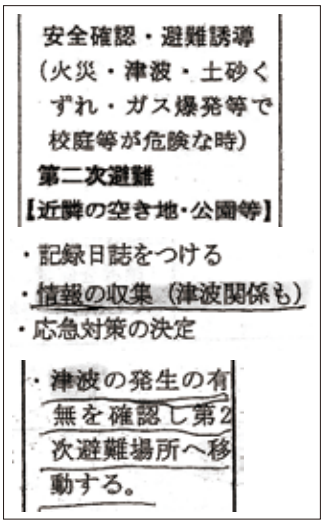
命を救うのは山ではなく、山に登るという行動です。時間・情報・手段も、マニュアルも研修も訓練も、いざというときの行動に結びつくものでなければなりません。

想定だけでも命を救えない

高裁判決では、想定が可能だったかどうかではなく「想定があったのにもかかわらず、備えていなかったこと」が問われました。

宮城県では「2003年からの30年間に99％以上の確率で大地震・津波が発生する」という想定のもと、再三にわたって対策を見直すよう各校に指示がありました。見直したことによって助かった学校もあります。

大川小学校のマニュアルには、津波発生時は「近隣の公園・空き地への避難」と記載してありました。ところが近くには公園も空き地もありません。避難行動の遅れにつながってしまったのは明らかです。避難場所を職員間で共有していれば、迷うことはなかったでしょう。せっかくの想定が、命を守る対策につながらなかったのです。



安全確認・避難誘導
（火災・津波・土砂くずれ・ガス爆発等で校庭等が危険な時）
第二次避難
【近隣の空き地・公園等】
・記録日誌をつける
・情報の収集（津波関係も）
・応急対策の決定
・津波の発生の有無を確認し第2次避難場所へ移動する。

平成22年度の
大川小学校の避難マニュアルより

当日ではなく平時

あの日、巨大な津波を目の前にして、冷静に行動できた人は何人いたでしょう。未体験の恐怖の中にあって、それは不可能に近いと考えるべきです。大きな災害が襲ったとき、人間にできることはごくわずかです。そして、意思決定が遅れるほどパニックは大きくなります。

避難の必要性を感じている先生も「ここで大丈夫」という先生もいました。いろいろな意見があるのは当然です。ただ、それはパニックの中で議論することではありません。あらかじめ決まっていれば「逃げるかどうか」「どこへ逃げるか」の議論は省くことができます。

高裁判決は「当日」の行動ではなく「平時」の取組みの問題を指摘しています。子どもを救いたくない教師はいません。津波が迫る中、必死だったはずです。無念だったはずです。でも、津波が目の前に迫ってからでは遅いのです。

避難の意思決定までの議論

① 逃げるかどうか
② どこへ逃げるか
③ 避難開始

避難の**決定**が遅れるほどパニックに陥りやすい。パニックになる前に避難開始するべき。

その場の判断だけでの避難も不可能ではないが、事前の備えによって①もしくは①②の議論を省くことができる。事前に備えていない場合は、①から議論しなければならない。

本気のマニュアルはシンプルになる

マニュアルは、教育委員会には提出されていたものの、職員間で共有されていません。当然、訓練に反映されることもありませんでした。教育委員会も提出されたマニュアルの点検・指導をしていませんでした。

防災に限らず、学校では毎年、提出のためのマニュアル、計画のための計画が数多く作られます。事故や問題が起こる度に、会議や通達、指針が増えるだけでは本末転倒です。分厚い冊子やパソコンのデータが命を守るのではありません。それらは時に子どもの命を守る使命を見えなくします。

学区内に海があり、川のそばに建っている学校の津波避難マニュアルに、具体的な避難場所を一行書き込むために必要なことはなんでしょう。そんなに複雑なことでしょうか。

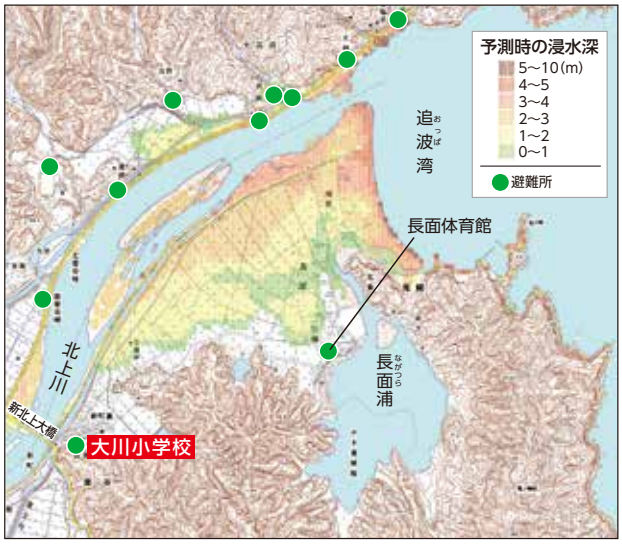
ハザードマップを信用してはいけないのか

高裁判決では、校庭すぐ脇の山ではなく700m離れた「バットの森」を避難場所に定めるべきだったとしています。この部分は重要です。

ハザードマップで津波による浸水が予想されていた釜谷地区。同じ海抜なのに大川小は浸水しない想定で避難場所になっていました。学校を避難場所にできれば校庭脇の山を整備する必要はありません。長面の体育館もそうです。結果的に、学校や体育館を避難場所にするためのハザードマップになっています。「バットの森」には当時、登るための道がありました。

判決は「ハザードマップは結論として誤り」と指摘していますが、それは数字的なものよりも、運用の仕方に対しての警鐘といえます。ハザードマップには「浸水の着色のない地域でも、状況によって浸水する恐れがありますので、注意してください」との記載があります。そもそも区域外が安全だと断定するものではないのです。

どんなに科学が発達しても想定には限界があり、誤差も生まれます。ハザードマップは津波を止める壁ではありません。そのことを踏まえた上で、命を守るため、有効に活用していかなくてはなりません。



宮城県の当時の津波ハザードマップ
津波は大川小には到達しない想定。長面の体育館もギリギリ浸水域外。また、北上川は越流しても、富士川は越えない想定だったが、実際は低くて細い富士川が先に溢れた。

バットの森 登り口

「逃げたけど津波は来なかったね」でいい

必要なのは、津波が迫りサイレンが鳴り響くパニックの中で正しい判断をすることではなく、パニックになる前に行動することです。

多くの学校は、津波到達のだいぶ前、あるいは結果的に津波が到達しなくても、念のために避難しました。一方で、備えが不十分で避難しなかったが、津波が到達しなかったので助かったという学校も少なくありません。ちょっとしたことで結果は逆になっていたかもしれません。

「備えがずさんだった」だけで済ませるべきではありません。特別な場所で起きた特別な出来事ではないのです。なぜこのような状況になったのかをわが事に置き換えて考えなければなりません。

私たちには地震も津波も止めることはできません。重要なのは、津波が到達するかどうかではなく、避難するかどうかです。「逃げたけど津波は来なかったね」でいいと思います。

本質は向き合いにくさの中に

じっとしゃがんでいた校庭はどんなに寒くて、怖かったでしょう。黒い津波を見たとき何を思ったでしょう。事実に向き合い、伝えることは容易ではありません。夢であったならどんなにいいでしょう。

専門家も教育関係者も、踏み込んだ議論を避け、検証が進みませんでした。教育関係者の間でタブー視されていたという話も耳にします。事実の解明も、伝承活動も、体制作りにまず時間がかかります。センセーショナルな言葉が一人歩きしてしまうことも少なくありません。この場所で宮城県の校長研修会が行われるまで10年近くかかりました。

この向き合いにくさこそ共有すべきです。私たちはそこから目を背けがちです。他人任せ、先送りにし、取り返しがつかなくなって後悔します。

ここはつらく悲しい場所であると同時に、大切な場所でもあることを誰もが知っています。分かっているのに動かないままでいたら、誰も声を上げないままでいたら、子どもたちや先生はなんと思うでしょう。

失われた命は戻ってきません。せめて、よりよい未来につながる小さなきっかけをこの場所から生み出せたらと願います。

いつもと同じ日に

今年はとても穏やかな天気。
去年は大風で大変でした。
3月11日が特別な日となって10年です。

多くの人がこの場所に足を運び
いくつもメディアの取材がありましたが
3月10日も3月12日も、実はそんなに変わらない日。
去年も、10年前も、来年も再来年も。

忘れないように。
あの日も
いつもと変わらない日だったこと。

2021.3.11 早朝

困難なことかもしれませんが、子どもの命を真ん中に置いて考えましょう、と。

事故の当事者であるはずの石巻市教育委員会では、学校で多くの児童、先生が犠牲になったことを本当に重く受け止めているのかと、疑わざるを得ない対応が重ねられました。

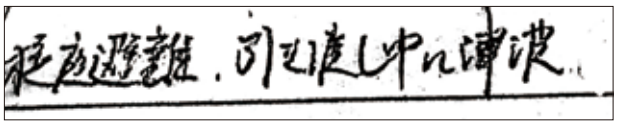
聞き取り調査のメモは廃棄、やりとりしたメールは削除、やがて「時間が経って、よく覚えていない」という言葉も目立ちました。助かった子どもたちが、犠牲になった友達のために一生懸命話してくれた証言もいくつか消されています。「今後検討します」と回答した担当者は次々に転出していきました。

「子どもの命を真ん中に置いて考えましょう」と呼びかけてきました。学校も市教委も文科省も報道も、そして遺族も「命」にしっかり向き合い、力を合わせていかなければなりません。たしかに困難かもしれません、目を背けたいことかもしれません。しかし、一番つらかったのは、寒い校庭で津波の恐怖におびえながらじっと待っていた子どもたちです。巨大な黒い波が襲ってきたときの子どもたちを思えば、道はひらけてくると信じています。

「引き渡し中に津波」という報告

2011年３月16日、当時の柏葉校長は市教委に出向き「引渡し中に津波」「油断」という報告をしました。しかしその事実は、手書きの報告書が2012年５月に出てくるまで、１年以上隠されてきました。「引渡し中」つまり、ほとんど逃げていないことが早い段階で分かっていたのに、市教委は遺族に「12分前に避難したようだ」と説明していたのです。

ところが校長は、この「引渡し中に津波」がきたという重要な証言を「避難所かどこかでの側聞」と



事故当日から提訴までの石巻市教育委員会の対応など

2011	3月11日	東日本大震災
	3月15日	校庭にいて助かったA教諭と当日不在だった校長がメールでやりとり（メールはその後削除された）
	3月16日	校長が市教委に「引き渡し中に津波・油断」と報告（※この報告書の存在は翌年5月まで明らかにされなかった）
	3月17日	校長、震災後はじめて学校へ
	4月9日	第1回保護者説明会（非公開） 市教委は地震による倒木のため山に避難しなかったと説明（実際は倒木はなかった）
	5月	市教委が、助かった児童に聞き取り調査
	6月4日	第2回説明会（非公開） 聞き取り調査をもとに説明 ●倒木があったように見えたに訂正 ●避難開始は津波到達12分前と説明 ●時間で打ち切り、説明会はこれで最後と発表
	8月21日	「市教委、聞き取り調査のメモすべて廃棄」が報道で明らかに。
2012	1月22日	第3回説明会（遺族が協議し報道に公開） ●2011年6月3日にA教諭から学校に届いたとされるFAXを公開 ●避難開始は津波到達7分前に訂正
	3月18日	第4回説明会 ●避難開始は津波到達1分前に訂正 ●今後も話し合いを続けることを確認
	4月	市教委の2人の担当者がともに転出
	5月	情報開示により、2011年3月16日の報告書※の存在が明らかに
	6月初旬	市が第三者検証委員会の設置を議会に提案。遺族の合意がなかったため、凍結。
	6月16日	遺族有志記者会見
	8月21日	市教委、はじめて現場検証
	9月5日	文科省が大川小事故の検証の方針発表（凍結していた検証委員会を文科省主導で立ち上げることに。ただし予算は石巻市）
	10月28日	第7回説明会　遺族有志が考察を発表。検証のポイントを示す。
	11月3日	検証委員会設置説明会
2013	2月6日	第1回検証委員会
	11月30日	小さな命の意味を考える会発足
2014	3月1日	検証委員会最終報告書提出
	3月10日	23名の遺族が県と市を提訴

し、聞いた相手が「男性か女性か」「大人か子どもか」その時の様子を何一つ覚えていないと言います。

倒木は一本もない（第１回説明会の矛盾）

2011年３月11日の震災以降、市教委・学校から遺族に対して経緯の説明はなく、その予定もありませんでした。

震災約1か月後の４月９日、ようやく1回目の説明会が行われました。非公開で行われた上、録音録画もせず、議事録も作られませんでした。遺族の録画データを借りて、１年以上経ってから議事録が作成されました。震災後の混乱の中とはいえ、誠意のない杜撰な対応と言わざるを得ません。

学校と市教委は「山は地震の揺れで倒木があり避難できなかった」と説明しました。唯一の生存教諭A先生も「バキバキと木が倒れてきた。」と話しました。実際は地震による倒木は１本もありません。

Ａ先生の証言はその他も矛盾だらけでした。指示を受け、「言わされた」のだと思います。

聞き取り調査時のメモ廃棄

2011年５月に、助かった児童へ聞き取り調査が行われました。その時、複数の児童が「山への避難を訴えていた先生や子どもの存在」について証言しています。子どもたち自身に危機感があったことを示す大切な証言です。子どもたちは危機を察し、逃げたかったのです。

ところが、市教委の正式な聞き取り報告書には、この証言は載っていません。報告書にはコピー＆ペーストしたような項目ばかりが並んでいます。聞き取り調査のメモ書き等は一斉に廃棄したとのことで、もちろん録音もありません。

記録にないので、説明会や検証委員会でも事実が曖昧になってしまいました。

説明会は2回だけの予定だった

２回目の説明会は６月４日。５月に児童などに行った聞き取り調査をもとにした説明があり、「倒木」は「あったように見えた」に訂正されました。

市教委は、質疑応答の途中で、時間だからと一方的に説明会を打ち切りました。その上、マスコミには「遺族は納得した」と答え、今後説明会はないと発表しました。

消された証言

第2回説明会（2011年6月4日）で、市教委は「津波はすごい勢いで子どもたちを飲み込んだり水圧で飛ばしたりした。後ろの方で手をつないだりしていた低学年の子どもたちも津波に飲みこまれた。ほとんど同時に学校側からも津波が来て、学校前は波と波がぶつかるように渦をまいていた」と説明しました。かなり具体的で、この状況を見ていた人がいたことを示す重要な証言ですが、その後の市教委の報告書からは消え、検証委員会でも無視されました。

また、「『ここって海沿いなの』という女子、『山さ逃げよう』という男子がいた」と説明していますが、2012年３月には「そのような事実はおさえていない」と説明を変えました。聞き取り報告書には記載されていないし、調査メモは廃棄。市教委は「記憶は変わるもの」と子どもの証言を否定しました（子どもの証言は震災から2カ月目。記憶が変わってしまうような時期のものではない）。

その他にもいつの間にか消えたり、曖昧になっている証言がいくつもあります。

謎のファックス

第2回説明会（2011年6月4日）の前日にA先生から届いた「保護者の皆様へ」というFAXが、7カ月後の第3回説明会（2012年1月22日）で突然公表され、丁寧なことに報道にも配られました。

病気療養で面会謝絶の人が書いたとは思えない長文で、わざわざ自筆の署名が入っていました。当時、このFAXの存在は教育長にも知らされず、市教委の中で２、３人だけが知っていたとのこと。

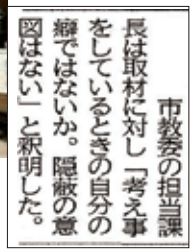
FAXは学校に届いたとされていますが、受け取った状況を校長は説明できませんでした。校長は学

校に届いたFAXを市教委にFAXで送ったと言いますが、市教委は校長が持参したと言います。その日の学校日誌には記載がありません。謎だらけです。

「言うなよ」のサイン

助かった複数の児童が「山への避難を訴えていた子がいた」と市教委の聞き取り調査で証言しており、取材にも答えています。ところが、市教委の報告書からはそのことが削除されました。

第6回説明会（2012年８月）でその点を問うと、応答していた市教委の指導主事に、上司が何度も口に指をあて「言うな」と指示をしていました。後日指摘されると「私は考えごとをするとき口に指をあてる」と答えました。



市教委の担当課長は取材に対し「考え事をしているときの自分の癖ではないか。隠蔽の意図はない」と釈明した。

河北新報の記事より▶

◀3月の学校の裏山。
草はない。

▼市教委が説明で使った
写真は、草ぼうぼうの7月。

前校長、休職の教諭と面会

大川小 市教委も知らず

◀2012年10月28日の説明会では、
校長が面会謝絶のA教諭と会っていた
ことが明らかになった。

事故や問題が起きたとき、できるだけ穏便に収束を図るのが「慣例」なのであれば、今こそ変えるのです。ましてや、学校で失われた子どもや先生の命を、嘘や言い訳で語るべきではありません。市教委の先生方も本心では分かっているはずです。

ボタンを掛け違えた場所は分かっています。それを認め、やり直すべきです。遅すぎることはありません。学校が「子どもを守り、輝かせる」場として信頼されるために、私たちは発信と対話を続けます。

忘れようとしない

５年経って、世の中は変わろうとしています。
何かが変わったかもしれないし、
あの日から止まったままのような気もします。
節目があるとすれば 3.11の前と後、それだけ。

変わろうとすることは、忘れようとすることではなく
忘れないことで、気づいたり、見直すことだと思っています。

あの日の夕方は中学の制服を受け取りに行くはずでした。
袖を通して喜ぶ姿、見たかったなぁ。
今日もたくさんの方が訪れ、想いを寄せてくださいます。

2016.03.23

大川小学校が閉校することになりました

大川小学校は、
昭和60年に大川第一小学校と第二小学校が統合して開校しました。

手元に一小、二小の閉校誌があります。
職員、元職員、保護者、卒業生、在校生、…多くのコメントが寄せられていて、
閉校・開校に対する関係者の想いがうかがえます。

学生だった私も一言書いています。
仙台に住んでみて、自分の中の故郷、母校の大切さをしみじみ思ったものでした。

31年前のページをめくりながら、今回の閉校について想いがめぐります。

大川小学校の歴史に幕が下ります。

学校がなくなるのは、地域にとって、卒業生にとって、
そして、在校生にとってすごく大きなことです。
ましてや、今回は3.11に、多くの子どもたちが亡くなったのが閉校の理由です。
いろんな想いが錯綜しています。

大川小は、日本で一番「いのちと故郷」を想い、その大切さを発信する学校です。
新しい学校になっても、そうあってほしいと願います。
遠くの方で揺れているあの子たちの笑顔が見えてきます。

「日本の子ども」「世界の友」
大川小の校歌には、ローカルじゃない
スケールの大きなフレーズが目立ちます。
そして、歌の最後は「未来をひらく」
この歌詞のように、
子どもたちはもちろん、私たちも、
大川に生まれ、育ったことを誇りに思い、
胸を張って未来に進みたいものです。

2016.07.02

いっこ下、じゅっこ上

中学生が見学に来ました。
制服姿の１年生。
「うちの娘は６年生でした。みんなのいっこ下ですね。」
と話しながら、
「ん、10コ上かな？」と思いました。

まぁ、どっちでもいいか。

2021.10.13

あの日の校庭が、子どもたちの命が、どんどん遠ざかっていく気がしました。

何のための第三者検証委員会なのか

大川小学校事故検証委員会（以下検証委員会）は、文部科学省の主導で、遺族も石巻市教育委員会も一切関わらない第三者による検証委員会として、石巻市が検証委員会事務局に委託契約する形で設置され、2013年2月にスタートしました。

『事故検証委員会』というものは、各地でその問題点が指摘されることが少なくありません。何を検証するための委員会なのかを踏まえ、見直すべきだと思います。大川小事故検証委員会も同様でした。

検証委員会は、2014年３月まで、約１年という時間と5700万円の経費を費やしましたが、途中で事実の解明を放棄しました。表面的な考察に終始し、検証とはほど遠い内容になってしまいました。そして、「事実は解明できなくても、提言はできる」といつのまにか方向転換をして提言をまとめました。

検証委員会が出した提言は大川小事故に基づいたものとは言えません。防災マニュアルの見直しや研修の充実など、大川小の事故がなくても挙げられる項目ばかりです。「監視カメラ」や「簡易地震計」の設置を本気で考えているのでしょうか？ そんな機器がなければ学校は子どもを守れないのでしょうか？この報告書に基づいた調査、研修等が、教師の仕事

大川小学校事故検証委員会 開催実績

	日時	主な内容
第1回	2013年2月7日 13:00 ～ 16:25	情報の取扱いについて 調査の方針・進め方等について
第2回	2013年3月21日 13:00 ～ 16:25	検証に対する遺族からの意見等について 情報収集・分析の現状と今後の方向について
第3回	2013年7月7日 13:00 ～ 16:30	中間とりまとめ(案)について 「事後対応」について
第4回	2013年8月24日 13:00 ～ 16:30	「中間とりまとめ」以降に判明した主な事実情報について 「事後対応」について
第5回	2013年10月20日 13:00 ～ 16:30	「事実情報に関するとりまとめ」について 今後の分析の方向性について
第6回	2013年11月3日 13:00 ～ 16:30	有識者による意見陳述 事故要因の分析と今後の再発防止対策について
第7回	2013年11月30日 12:20 ～ 17:27	意見募集等で寄せられた意見等の反映について 「当日の避難行動」とその分析について 遺族との意見交換
第8回	2013年12月22日 10:30 ～ 17:35 (休憩12:30 ～ 13:20)	当日の避難行動」の分析について 事後対応について 遺族との意見交換
第9回	2014年1月19日 12:30 ～ 17:30	最終報告書(案)について 遺族との意見交換
―	2014年2月9日	意見交換の続き
第10回	2014年2月23日	最終報告書説明会 （検証委員会解散）
―	2014年3月1日	石巻市へ最終報告書提出
―	2014年3月23日	石巻市教育委委員会による遺族説明会

最終報告書（2014年3月提出）概要

■避難開始に関する教職員の意思決定が遅れ、避難先として河川堤防に近い「三角地帯」を選択したことが、最大の直接的要因。ただし、その原因は明らかにできなかった。

■組織的かつ積極的な情報収集と、活発な議論に基づく柔軟かつ迅速な意思決定がなされていれば、もっと早い時点で避難が開始されていた可能性があることは否定できない。

■災害対応マニュアルは十分検討したものではなかったと推定され、市教育委員会は各校から提出されたマニュアルを確認し、指導を行う体制をとっていなかったものと推定される。

■校舎の立地・設計に関し、災害危険への配慮が必ずしも十分には行われていなかったものと推定される。

■検証結果に基づく24の提言（教員養成課程における学校防災の位置づけ、教職員研修の充実、マニュアルの改善、監視カメラや簡易地震計の設置、地域との連携など）

大川小学校事故検証委員会
（報告書および資料等を掲載）
www.e-riss.co.jp/oic/pg85.html

全国から検証委員会に寄せられた
パブリックコメント（検証委員会ウェブサイト内）
ur2.link/PtRv

をより煩雑化する要因にならないことを祈ります。

委員会が立ち上がる前の約２年間で、遺族や報道等は「意思決定が遅れたこと、避難ルートを誤ったこと」の２点を検証のポイントとして捉えていました。ところが、検証委員会が出した最終報告書には「事故の直接的な原因は、意思決定が遅れ、かつ避難先を河川堤防付近としたこと」とあり、「なぜそうなったのかは明らかにできなかった」と述べています。つまり、もっとも肝心な部分は曖昧なままで終了したのです。

最後の検証委員会で、委員の半数以上が欠席したことでも分かるように、終盤は委員のモチベーションもすっかり低下していました。

たまたま親子だった？ 検証委員会の人選

検証委員の人選には疑問点が多くありました。

2012年11月に設立の説明会があったのですが、委員の名簿が示されたのは前日の午後。遺族は検討する術も時間もありませんでした。

学校事故の検証なのに、学校関係者が不在。その一方で弁護士が3名も入っています。さらに、事務局トップの社会安全研究所の首藤由紀所長と、検証委員の首藤伸夫東北大名誉教授が親子であることが明らかにされました。

この手の委員会を組織する際、血縁関係はまず避けるべきです。文科省は「たまたま親子だった」と説明しましたが、だとすれば辞退するのが普通ではないでしょうか。実際、検証の中で明らかに弊害となっていましたし、伸夫氏は欠席が目立ちました。

決められていた検証範囲

2013年11月、検証委員会が迷走し、行き詰まっていた時期に、委員長は「私たちは決められたフィールド（範囲）でしか検証できない」と苦しそうに弁明しました。徹底的に究明すると言って始まった検証委員会ですが、実は「ここから出てはいけない」という範囲が与えられていたのです。まさに「壁」です。検証が進められるわけがありません。

検証委員会に「範囲」があったのは委員の構成からも分かります。検証委員を選出したのは誰でしょうか？ この「壁」を作ったのは、市教委、市、政治家、検証委員会事務局、文科省…？ なぜこんな「壁」ができるのでしょうか。

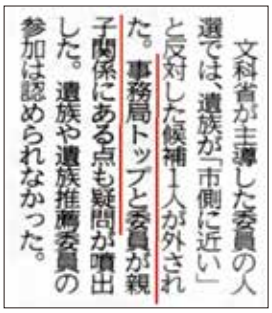
学校でこれだけのことが起きているのです。市教委や検証委員会に「範囲」が与えられていたとしても、それを突き破ろうという人が一人もいなかったのでしょうか？ 悔しくなかったのでしょうか？

検証報告書が提出されて数年が経ちました。あれは一体なんだったのでしょうか。

率直に言って、検証委員会が立ち上がって最終報告をするまでの約1年間（2013年２月～ 14年３月）は、一連の経緯の中で、できればなかったことにしたい１年間です。でも、看過するわけにいきません。被災地の予算を5700万円費やして、文科省が主導して行った委員会なのですから。

大川小学校事故検証委員会 委員名簿（肩書きは当時）

委員長	室崎 益輝	関西学院大学総合政策学部都市政策学科教授・災害復興制度研究所長、神戸大学名誉教授
委員	数見 隆生	東北福祉大学総合福祉学部社会教育学科教授
	佐藤 健宗	弁護士、鉄道安全推進会議（TASK）事務局長、関西大学社会安全学部客員教授
	首藤 伸夫	東北大学名誉教授
	美谷島 邦子	8.12連絡会事務局長
	芳賀 繁	立教大学現代心理学部心理学科教授
調査委員	大橋 智樹	宮城学院女子大学学芸学部心理行動科学科学科長・教授
	佐藤 美砂	弁護士、公益財団法人日弁連交通事故相談センター理事、宮城地方最低賃金審議会公益委員
	翠川 洋	弁護士、東北大学法科大学院非常勤講師、公益社団法人みやぎ被害者支援センター理事
	南 哲	神戸大学名誉教授
事務局	株式会社 社会安全研究所 （代表取締役 首藤 由紀）	


文科省が主導した委員の人選では、遺族が「市側に近い」と反対した候補1人が外された。事務局トップと委員が親子関係にある点も疑問が噴出した。遺族や遺族推薦委員の参加は認められなかった。

▲河北新報より

原則公開を謳った検証委員会で、第１回から延々と話し合われたのは「どの部分を非公開にするのか」です。以後、傍聴に行く度に、議論とは名ばかりの、耳を疑うようなやりとりが目の前で繰り広げられました。

第２回は３人の遺族の意見陳述が中心で、その後は、「大川小にはラジオがあったのか」等周辺情報の確認に終始し、肝心の検証ポイント「51分間の謎」についての言及はありませんでした。

それなのに第３回目で、早くも「中間とりまとめ」が示されたのです。

その後も、水位計のグラフを誤って逆に読むなど、首をかしげることばかりでした。

いろんな実績をもった教授や弁護士を集めたはずなのに、どうしてこうなるのでしょう？ 誰のための、何のための検証なのでしょう？

あの日の校庭が、子どもたちの命が、どんどん遠ざかっていく気がしました。

昨今、様々な事故事件で立ち上げる第三者検証委員会なるものは「騒ぎを鎮めるための装置だ」と表現した人がいましたが、鎮めるどころか逆なですることも少なくないようです。みんな同じ構図に見えます。今になって思えば、立ち上げの段階で突っ込みどころ満載なのですが、「疑わしきはとりあげ、事実をすべて明らかにする」という言葉に対し、黙って見守るしかなかった当時の自分たちが歯がゆいです。

組織（学校）運営の中で、「責任」は「果たすもの」ではなく、「かぶりたくないもの」「逃れるもの」であったのなら、あの日のような状況の中で「責任」は足かせになります。

同じことが、検証委員会でも起きていました。責任を問われないようにする組織構造。覚悟した言葉を誰も言わない。まるであの日の校庭を見ている思いでした。

「そっちに行ってはいけない」と声をあげること。それは誰でもいいのです。

2013年11月末、「小さな命の意味を考える会」はそうして始まりました。

検証委員会レポート　*2014. 01. 23　最終報告案で報告されたもの*

2014年1月19日に最終報告案が示されました。質疑応答が終わらず、2月9日にも行われることになりました。

１月20日の各新聞の見出しはこんな感じです。

「津波避難 決定遅れ惨事」朝日新聞

「避難決定に遅れ」河北新報

「東日本大震災：大川小の事故報告最終案
　避難決定遅れ指摘」毎日新聞

検証委員会は、「避難開始に関する意思決定の時期が遅かったこと」「避難先として河川堤防に近い三角地帯を選択したこと」が事故の要因であるとする最終報告案を示しました。

誰も体験したことのないようなあの揺れの後、生まれて初めて聞く「大津波警報」があり、津波到達まで51分あったこと。子どもたちが険しい山の脇の狭い民家の裏（しかも実は行き止まり）の道を通って、行ってはいけない川の方向に向かったことは、震災後すぐに判明していて、市教委との話し合いや報道でも確認されていたことです。

私たちは、検証委員会がスタートする前の2012年10月に「検証のポイント」として「意思決定が遅れたのはなぜか」「狭い場所を通って、川に向かったのはなぜか」の２点を示しました。

そのポイントについては、残念ながら答えていただけませんでした。何も進んでいないのです。

火事の現場を調べた後、「この火事の原因は『火』である」と言うことと何ら変わらないように思います。

19日の検証委員会では、委員の口から「限界」という言葉が聞かれました。

可能性も否定できない
…ものと推定される
…と考えられる
要因のひとつにもなっていたものと推定される
必ずしも十分に定着した状態までには至っていなかったものと推定される
検討する余地があると考えられる
影響を及ぼした可能性がある
信憑性を疑わせる余地をもたらした
その詳細を明らかにすることはできなかった
…可能性があるが、その理由については明らかにすることができなかった

このような書き方をすれば、あらゆる可能性があるわけで、事実があったのかどうかさえどっちつかずになります。

たとえば「指揮台の上にラジオがあって聞いていた」という複数の証言があるのにもかかわらず、「ラジオを聞いていなかったかもしれない」という一人の証言があったということで、「ラジオを聞いていたかどうかの断言はできない」のだそうです。

あまりにも曖昧で、疑問点、というより間違いがたくさんあります。そのような状態なのに、検証委員会から24もの提言も示されました。

また、こんな部分があります。

「単に指示に従うのではなく、自らの行動を自ら判断する訓練を行うことが必要である」

津波の襲来を察知し、逃げたいと訴えてもじっと指示を待つしかなかった子どもたちを全否定しています。少なくとも大川小の事故から得られる教訓ではありません。即刻削除し、子どもたちにあやまるべきです。

すべて間違いとは言いません。専門家ならではの視点、分析は所々に見受けられます。検証委員の方々は時間に追われながら、懸命に取り組んでくださったのは分かります。でも、「だから仕方ない」と済ませてはいけません。

検証委員会の先生方は「やるだけのことはやった」「ささやかな達成感がある」と言うけれど、何を報告したものなのでしょうか。

報告書を読む前に注意点

「ほぼ間違いない場合」は「推定される」なのだそうです。
違うと思いますが…。
「ほぼ間違いない」と書けばいいのに。

報告書には「推定される」は**93カ所**、「考えられる」は**134カ所**。

分析と評価（第4章及び第5章5.5節）における文末表現

推定の確からしさ	用いた表現
ほぼ間違いない場合	～と推定される
可能性が高い場合	～と考えられる
可能性がある場合	～の可能性がある
可能性が否定できない場合	～の可能性が否定できない
明らかにできなかった場合	～を明らかにすることはできなかった

検証委員会レポート

2014. 02. 10　記録的な積雪と、記録されない真実

記録的な積雪だった２月９日、大川小事故検証委員会で、最終報告書案についての「最後」の意見交換が行われました。最後かもしれないので、疑問に思う点は曖昧にせず伝えました。２回に渡る意見交換会で100以上の疑問点が出されましたが、多くの「？」が残されたままになりました。この報告を「最終」としていいのでしょうか。

何カ所か事実と違う点の削除、曖昧な記述になっている点の訂正は認めていただきました。

たとえば「山に逃げよう」と言った子どもたちがいたことは（2年以上前に分かっていたことですが）断定的な記述に訂正されます。（**※結局、最終報告書では断定的な記述になっていませんでした。**）

監視カメラ設置など、24もの提言がなされていますが、もっと精選し、具体的に書くようお願いしました。提言14「迷ったときには生徒の安全を何よりも第一に考え」の「安全」は「命」に書き換えることになりました。

でも、50分間、なぜ避難しなかったのかは、結局、闇の中です。深く突っ込んで議論なされたとは思えません。

避難の必要性を強く感じていた、児童、保護者、地区民、先生が複数います。すぐそばに登れる山があります。会社から連絡を受けたバスも方向転換を済ませて待機していました。救える条件があったことは明らかです。それなのに救えなかった。動けなかった。逃げろ！と言えなかった。

なぜ？

いくつか調べてほしいポイントを指摘し続けてきましたが、「重要であるが、それ以上踏み込めない」のだそうです。

犠牲になった友だちのために、つらい中、一生懸命証言してくれた子どもの言葉は、最後まで信用していただけませんでした（市教委は資料を廃棄）。

一方で、重要な証言について、市教委の先生に問

うと「もう忘れた」と答えるそうです。だから、検証に反映されないことになるのです。

「忘れた」と答えるのもあり得ない。ああそうですかと済ませる検証委員会もあり得ない。子どもの命よりも守るべきものがあるのでしょうか。

大切なものを優先にできない、おかしいと思ったことを口に出せない、ここにいてはダメだと言えない、ずっと同じ構図です。この国のあちこちで繰り返される同じ構図。それを動かしたいと思ってきましたが…。

検証は、あの子たちの命に意味を持たせる作業だと思います。警報が鳴り響く、寒い校庭で、じっとしゃがんでいた子どもたちにもっともっと目をこらしてほしかった。

せめて、不十分な検証結果であると明記してほしいと思います。

記録されれば、何十年経っても2014年２月９日○○cmの積雪と分かるけど、記録されなければ、何年か前にどこかの学校で津波かなんかで子どもが死んだんだってさ、へ～知らなかった、まあいいか、ってなる。

大災害だったから仕方なかったんだよな、となる。

これだけの大雪は、溶けた後も記録に残るでしょう。これだけの事故なのに、真実は記録されないまま、消えてしまうのでしょうか。悲しみだけが降り積もります。

検証委員会レポート

2014. 02. 12　限界という途中下車

１月26日と２月９日、最終報告案についての意見交換会。遺族からの質問に対し、検証委員長は「検証委員会の限界」という言葉を再三使用しました。「壁」と言う語も出てきました。

何が限界なのでしょう。時間？予算？能力？それとも別の限界でしょうか？それを知りたいものです。
2012年11月25日、検証委員会の立ち上げにあたって、事務局から重視する点が示されました。たとえば以下の点です。

なぜきちんと判断して避難行動がとれなかったのか、それはマニュアルがきちんと定められていなかったからだというのであれば、では、なぜそのマニュアルがきちんとできていなかったのか。こういった「なぜ」を繰り返すことが非常に重要で、それによって背後にある原因を究めていくことができる。

現場にいた個人の判断の誤りなどにとどまらず、それをもたらした背後の要因、それは多くの場合は組織の問題であるが、そういった問題に踏み込まなければきちんとした対策はとれない。
様々な要因が重なり合って大きな事故・災害をもたらす。それらをすべて明らかにすることが検証として必要。

事故調査や検証の目的が責任追及でないからといって、結果として責任が明らかになるからという理由で報告書の筆を鈍らせてはいけない。結果として、真実を明らかにし、分析をすると、どこに責任があるか明らかになってしまう可能性がある。それを恐れて検証の調査の腕、あるいは報告書を執筆する筆を鈍らせてはならない。

「なぜ」を繰り返す
背後の要因に踏み込む
要因はすべて明らかにする
責任の所在が明らかになることを恐れない
その言葉に、ほんの少しでも期待した私たちが甘かったのでしょうか。
「限界」で済ませるくらいなら、 はじめからこんなことを言わないでほしかった。

絶対伝わるはずだと思ってきました。だって、学校であんなにたくさんの子どもの命が失われたのですから。きっと伝わっていると思います。でも、壁は動かなかった。
あの日に発車した列車に、２年後に乗り込んできた検証委員の先生方は、持てない荷物は窓から放り、あるいは車内に残したまま、「最終報告」という駅で降りてゆく、そんな感じがします。

検証委員会レポート

2014. 02. 23　誰が読むための２３３頁なんだろう？

2014年2月23日、最終報告を行い、検証委員会は解散しました。

最終報告書についての説明会前日に送りつけられた233頁の報告書を前に、この検証の意味を考えています。
委員の皆さんと事務局が、この報告書をまとめるために、必死に作業したことはうかがえます。
でも、少なくとも私たちの望んだ検証ではないし、検証委員会が当初やりますといった検証でもない。
分厚くなればなるほど、本質は見えなくなります。

大津波警報が鳴り響く寒い校庭で51分、山への避難を訴えていた子どもたちの姿を見えなくする分厚さです。

「逃げよう！」と強く言えなかった。
みんな後悔しています。
その後悔を無駄にしてほしくなかった。
ほとんど掘り下げられていません。

室崎委員長は第４回検証委員会で、「行政がときとして事なかれ主義に陥る」ということをふまえ、「根底にある、日本社会全体が持っている問題みたいなものまできちんと指摘しないと次に生きてこない」と述べていますが、検証委員会は、まさに事なかれ主義に陥ったと言えます。

大事だと分かっていることを口に出すには、覚悟が必要なのでしょうか。口に出されると困る人がいるようです。そのために表に出ない「大事なこと」がたくさんあります。それを変えなければ。

そのことは、この報告書には書いてありませんが、この検証委員会そのものが問題を浮き彫りにしました。

言葉にする「覚悟」がなかったのです。あの日の校庭も、検証委員会も。

「危ない、だめだ」と声を上げるのは誰でもいい。他から何を言われようが、命を救う。それを「勇気」「覚悟」ではなく「常識」にしていく。

検証委員会レポート　*2014. 02. 24　後味の悪い閉会式のような最終説明会*

ソチ五輪閉会式と同じ日に、検証委員会は閉会するようです。

今回の最終説明会でも「限界」「不十分」という言葉が繰り返されました。不十分な検証結果であったことを、検証委員自らが認めています。

「最終」だというのに、矛盾点や疑問が続出。委員長は印刷作業が始まっているというのに、修正を加えることを約束しました（もう印刷を始めているというのも変ですが）。

委員の先生方は口々に最後の挨拶
「これを一つの区切りとして……」
「これからも別の形で」
「今回の提言を今後の防災に役立てて」
そう言うのは簡単ですよね。
中には「不十分で申し訳ありませんが、大変勉強になりました。」と言う言葉があり、耳を疑いました。
多くの委員が欠席しましたが、「体調不良」だそうです。

不十分とされた一例をあげます。石巻市教委は、2011年６月４日の保護者説明会で「(川からと、海から来た波がぶつかり）校庭で渦を巻いていた」という説明をしています。**津波が襲った場面を高いところから見ていた人がいる**という重要な部分です。
市教委はこの部分の根拠を説明できていません。だから報告書には記載がありません。では「渦を巻いていた」という説明はいったい？
肝心なところなのに、深く踏み込んでいません。市教委が「覚えていない」と言えば「証言が得られない」となります。同様にして、いつのまにか消えている事実や証言が多くあります。
どうして詳しく調べないのですかと聞くと、「遺族と検証委員会の認識の違い」で片付けます。あるいは「そういう事実は明らかにならなくても提言はできる」と開き直ります。「可能な限り事実を明らかにする」と言っていたはずなのに、すり替えられた感じがします。だとすれば、今回出された提言は事実に基づかない提言です。

「引き渡し中に津波」がきたという報告書の根拠、生存教諭からのファックスを公開しなかった理由、山への避難を訴えた子どもの存在について説明が二転三転したことも、聞き取り調査メモ廃棄についても、私たちが疑問に思っていたことについては、新しく分かった事実は何もありません。
「私たちなりに懸命に事実を集めました」と言うものの、新たな事実は集められなかったとも認めました。
メダルゼロ、名場面ゼロ、誰も思い出さない１年間のパフォーマンスが終わり、ほとんどページをめくられることのない分厚い報告書がまもなく印刷完了です。

検証委員会レポート

2014. 03. 30　何も説明しない説明会

2014年３月23日、検証委員会からの最終報告書の提出を受けて、市教委が説明会を行いました。

３月23日、石巻市教育委員会は、検証委員会の最終報告を受けて、遺族に対し説明会を行いました。ここでそのことを書こうと思っていたのですが、言葉が思いつきませんでした。市教委は何も説明しなかったからです。

挨拶の後、2人の職員が、大川小の事故とは関係のない市の防災･教育の方針を２、３分ずつ説明（原稿棒読み）しただけで、遺族には資料も何もありませんでした。

市立の小学校で84名も犠牲になった事故の検証。
遺族が頼みもしないのに勝手に立ち上げ、5700万円をつぎ込んで行った検証。
その報告会をそれで済ませたのです。

その後の質疑応答では、いくら質問をしても、まともに答えてくれませんでした。検証結果を重く受け止めていますと言いながら、検証内容についての質問をすると、「まだよく読んでいません」「これから検討」「お答えできません」を繰り返しました。
「教師とは、たまたま居合わせた大人と同じなのですか」という質問に、誰も答えることができず、数分間下を向いたままでした。指導主事の先生方も、教育課長も、教育長も、事務局長も、市長も。その他の質問もそうです。下を向いて、メモをとるふりをし、じっとうつむいたまま…。

あの日の校庭もこんな状態だったのかなと、背筋が凍り付く想いでした。
責任のある言葉を誰も言わない。
いくら「逃げよう」「逃げたい」と思っていても動けない。50分間も。３年間も。

４月には担当者がまた代わるようです。
誰がなんと言おうと、こんなことがまかり通るのは絶対おかしい。
ほんとうは遺族も、市教委も、検証委も、その他のみなさんも同じ言葉でいいはずです。「命」を真ん中にすればいいのですから。そういう言葉を探していきたいと思っています。

市教委説明を避ける。NHKニュース（動画）
2014年3月23日
www.youtube.com/watch?v=qaMKg-rlqOE&feature=youtu.be

セウォル号事故遺族の皆様へ

2014年4月、韓国でフェリーの沈没事故があり、修学旅行の高校生を含む多くの方が犠牲になりました。ほどなく、我が子を失った悲しみのあまり、遺族が自殺をしたという話を耳にし「何かを伝えなくては」と思い立ち、一気に書いたのがこの文章です。

とりあえず、韓国に知人がいるという方に渡したところ、数日後、ハンギョレ新聞社から連絡が来て、全文が掲載されることになりました。

その後、何度か遺族同士が会う機会があり、大川小にも来てくださいました。

＊　＊　＊　＊　＊

ニュースで、深い悲しみに沈んでいる皆様の様子を知りました。あまりに突然の悲しみと理不尽さに、自ら命を絶つ遺族もおられるという報道に、いたたまれず手紙を書いています。

私の国では、３年前の大津波で、たくさんの命が、木の葉のように流されて消えました。病気とも、戦争とも違います。何の前触れもない死です。

あの年は、毎週のように知人の葬儀があり、泣いて、落ち込んで、悔しがり、気がおかしくなりそうでした。今も、あの人はもういないんだと、ふと思い出し、何とも言えず胸が苦しくなります。何の疑問もなく続くと思っていた日常があの日から突然、目の前から消えました。

私の娘は学校で亡くなりました。石巻市立大川小学校の６年生、あと一週間で卒業式でした。学校の前の道路に、泥だらけになった小さな遺体が、次々に並べられていました。とても受け入れることなどできませんでした。今でもそうです。家にいると、娘の「ただいま」が聞こえそうな気がしてなりません。

我が子の名前を呼びながら、海に向かって泣き崩れる方々の映像を見て、とても他人事とは思えませんでした。こんな形で、家族を残して遠くに旅立たなければならないなんて…。怖かったでしょう、冷たかったでしょう、どんなに生きたかったことでしょう。

セウォル号では、危機に対する備えが不十分であったと聞きます。人の命を預かるはずの組織が、命を最優先にしていなかったということです。「命」よりも他のものを優先し、今日もどうせ大丈夫、少しぐらいならいいだろうという積み重ねが、船長をはじめとした乗組員の行動にも表れています。避難マニュアルも、救命ボートも、命を守るためのものではありませんでした。

大川小学校の災害への備えや避難マニュアルも実体のない、杜撰なものであったことが分かっています。そして、保護者や子どもたちが避難を訴えていたにもかかわらず、50分間校庭で動くことはありませんでした。

私は教員です。学校管理下で子どもを亡くした私の職場は、学校です。子どもたちは逃げたくても先生の指示を待っていました。先生の一言で、全員が助かっていたでしょう。体験したことのない揺れの後、大津波警報が鳴り響いていたあの状況で「逃げろ！」と、なぜ強く言えなかったのか、私はいつも自問しています。

セウォル号の事故で、未だに大川小学校での事故が教訓にもなっていないことが分かりました。３年以上も前の事故を通して、命を預かることの意味が見直されていれば、今回のような事故は防げたかもしれないとさえ思います。船でも列車でも、災害でも、当たり前のことをしていれば守られるはずの命が失われる事故・事件は、けっしてあってはなりません。真に大切なことを、最優先に見つめ、語れる社会にしていかなければと強く思います。

命とはなんとはかないものでしょう。地球がちょっと身震いしただけで、破れてしまう薄い紙のようです。一方で、どんな大津波でも流されないものは、心だということを知りました。どんな状況にあっても人は希望を見つけ出せることを知りました。

瓦礫だらけだった町が少しずつ息を吹き返しています。心が折れなければ、希望を持ち続ければ、やがて光は見えてきます。茎が光を目指して伸びていくように。たとえゆっくりでも、たとえ一人でも、それに向かって進めばいいのだと思います。

あの子たちの犠牲が無駄になるかどうか、それが問われているのは生きている私たちです。小さな命たちを未来のために意味のあるものにしたい、それが、三年かかってようやく見つけた私にとってのかすかな光です。

他の国の見知らぬ者が、勝手なことを述べて、嫌な想いをされたのであれば申し訳ありません。関係ないだろう、と言われれば、たしかにそうです。でも、少なくとも私は、こうして書かずにはいられませんでした。皆さんとは、何らかの形で手を携えていけたらとも思っています。

もうすぐ娘の誕生日です。誕生日、お正月、クリスマス…、楽しい思い出の日が今年も巡ってきます。その度、胸を締め付けるこの悲しみは、娘の存在そのものです。だから、無理して乗り越えなくてもいいんだと、最近ようやく気づきました。私は、この悲しみとともに残りの人生を歩んでいきたいと思っています。

時折、夢に出てくる娘はいつも笑顔です。
どうぞご自愛ください。

（2014年5月31日　ハンギョレ新聞掲載）

たくさんの「ただいま」

福知山線事故から10年となる2015年４月25日、大阪を会場に、福知山線事故（2005年）、日航機事故（1985年）、大邱（テグ）地下鉄事件（2003年）、セウォル号事故（2014年）の犠牲者を追悼する「日韓事故遺族追悼の夕べ」という集会が開かれ、大川小事故遺族も参加しました。

セウォル号事故遺族の方からの希望を受けて、関係者の方がつないでくださったのです。

日航機、大邱、福知山の遺族の方々ともお話ができました。集会後、交流会があり、翌日はセウォル号事故遺族の皆さんと情報交換会もありました。

当初は、国も状況も違う中で、話し合いをどう進めればいいのか心配でしたが、それは必要ありませんでした。

突然いなくなってしまった大切な家族、
救えたであろう命、
事実に向き合おうとしない構図、
進まない検証、
周囲からのまなざし、中傷、
支援してくださる方々、
そして、繰り返される悲劇…、
「行ってきます」と出て行ったまま
言えなかった、聞けなかった、たくさんの「ただいま」があります。
我が子を失う悲しみに国境はありません。

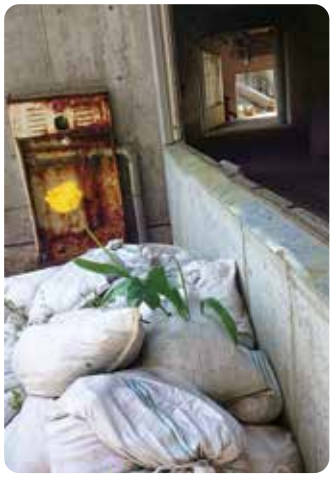
大阪に発つ朝、夢を見ました。大きな乗り物の中に大勢の人と一緒にいる夢です。知っている顔もいましたが、見たことのない人がほとんどでした。交換会に参加して「あ、一緒に乗っていたのはこの方々だ」と分かりました。

乗り込んだ時間、場所は違っても、同じ目的地に向かう乗り物に乗っているんだと。

あの日から４年以上が過ぎました。未だに「遺族」と呼ばれる度に、何とも言えない感覚があります。周囲の方にも気を遣わせてしまっていることでしょう。でも、私はやっぱり「遺族」という立場を受けとめます。あの命に向き合いたいです。

今日も世界中が、元気な「ただいま」であふれますように。

大阪から帰った翌日、校舎の脇の土嚢に咲いたチューリップを見つけました。



2015.5.3

子どもの命を守り輝かせるのが、教師の「使命」であり「誇り」です。

文部科学省が主導した第三者検証委員会（2013年２月～ 14年３月）は、踏み込んだ議論がほとんどないまま終了。23名の遺族は2014年３月10日、損害賠償権の時効の前日に提訴し、宮城県・石巻市の法的責任を問うことになりました。

大川小学校津波事故訴訟 概要

第一審（仙台地方裁判所）
2014年３月10日提訴／ 2016年10月26日判決
【主な争点】
■地震発生後の津波到達の予見可能性
■震災当日の具体的な避難行動
■事故結果の回避可能性
主に津波当日の教職員の判断･行動が問われ、原告勝訴。宮城県・石巻市はすぐに控訴し、問われるべきは当日のことだけではないとする原告側も控訴しました。

控訴審（仙台高等裁判所）
2018年４月26日判決
【主な争点】
■地震発生前の津波に対する危険認識
■避難マニュアル整備などを巡る組織対応
■事故結果の回避可能性
事前の備えを問われ、最低限すべきことを怠った学校と教育委員会の責任が明らかになり、原告勝訴。
判決文は340ページ以上に。宮城県・石巻市は上告。
2019年10月10日、最高裁が県・市の上告を棄却。
仙台高裁の判決が確定。

教育行政に求められるのは形だけの取り組みではなく、教師が「子どもの輝く命」にまっすぐ向き合える環境づくりだと思います。判決は終わりではなくスタートラインです。

第一審（仙台地方裁判所）　2016年（平成28年）10月26日判決

一審の争点

津波の予見可能性と結果回避可能性（一審は危機管理マニュアルの改訂等の義務違反は争点とせず）

津波の予見可能性

①大川小には「地震（津波）発生時のマニュアル」が存在し、教員は津波の情報を収集し津波発生の有無を確認して避難するよう明記。
②前年、市は「教頭・中堅教員研修会」を開催。大川小は３名参加、地震及び津波に対する諸施策を研修。
③2日前（3月9日）震度５の地震発生の際、校長は「津波が来たら山に避難」などと話していた。
④14時52分、15時10分に防災無線がサイレン音を流し「大津波警報」を伝え、校庭でも聞こえていた。
⑤指揮台の上のラジオも警報を伝えていた。
⑥15時前後に児童を迎えに来た保護者は、教員に「カーラジオで津波が来ると言っている」「早く山に逃げて」と強く進言。生活センターにいた知人は同じ進言を聞き避難。
⑦校舎内にいた教務主任も揺れが収まった直後「山だ」と叫んでおり、「山に逃げますか」と教頭に進言している。教頭も地区民に「裏山に登らせても大丈夫か」と聞いている。
⑧15時20分頃河北消防署の消防車、15時25分頃には河北総合支所の広報車が高台避難を呼びかけて学校前を通過。

結果回避可能性

①大川小の裏山には椎茸栽培をしていた斜面を登る踏み分け道があり容易に避難できた。
②走れば１分、徒歩でも２分で裏山に避難できた。
③社会の授業で３年生児童も登った経験のある護壁のコンクリートタタキに登ることも可能。
④地震発生時にはスクールバスが待機。釜谷トンネルやバットの森などへの避難も可能。

第一審判決

津波は遅くとも到来７分前までに予見でき、裏山に避難が可能であったと判断。
現場過失を認定。（原告側勝訴）

被告石巻市・宮城県は判決を不服として控訴。問われるべきは当日のことだけではないとする原告側も控訴。

一審判決の先例的価値と限界

①津波という自然現象による死亡事案について、1000年に一度の想定外の津波だから学校には法的責任は問えないとの固定観念を打ち破った。
②自然災害における学校防災・学校安全対策の見直しに繋がる判決と評価できるか。
～大きな問題と限界
③津波の予見可能性を認定した時期が遅すぎる。もっと早く予見できた。
～予見義務（情報収集義務）の検討が不十分
④事故後の不法行為を認めない等不十分な内容。
⑤原告らが主張した「危機管理マニュアルの整備」や「避難路の整備等の事前対応義務とその違反」は否定し、責任の有無の判断を地震発生後の津波による児童の生命身体への危険発生の予見可能性のみに焦点を当てた判断となっており、学校防災の根本的な見直しを示唆するものではない。

一審では当日の避難行動の過失を認め、危機管理マニュアル等の事前体制の義務違反は問わず

控訴審（仙台高等裁判所）　2018年（平成30年）4月26日判決

控訴審の争点

地震発生後の個々の教師の対応が適切だったかではなく、地震が発生する前の段階で、市教委や学校がなすべき防災対策をしていたかどうかを判断

①市教委と学校は、学校保健安全法26条から29条に基づき、地震発生前の2010年４月末の時点で想定されていた連動型宮城県沖地震による津波から児童の生命・身体の安全を確保すべき具体的義務を負っていた。〈判決書14 ～ 15ｐ〉
②大川小は行政が作成した津波ハザードマップでは浸水区域外とされていたが、公教育の学区制のもとで、保護者・児童は自由に学校を選ぶことはできず、児童は教師の言うことに従わざるを得ない学校の性質に照らせば、学校関係者は、一般市民より高いレベルで、児童の命を守るための防災準備をしなければならない立場にあった。
③●汽水域で海の潮位の影響を受ける北上川から200mしか離れていない
●大川小付近の標高は１m～ 1.5mしかなく、北上川とを隔てるものは右岸堤防のみ
●宮城県沖地震（連動）では堤防が決壊する危険が十分予想されたこと、その場合には北上川の河川水や遡上した津波の流入により浸水することは十分に予見できた。〈判決書45ｐほか〉
④市教委や校長、教頭らは、作成を義務付けられていた津波防災マニュアルにおける津波避難場所として「近隣の空き地・公園等」ではなく、避難可能でかつ安全な避難場所（バットの森）を定め、かつ避難経路及び避難方法を記載するなどして改訂すべき義務を怠った。

「小さな命の意味を考える会」ウェブサイト
訴訟についてのまとめ
311chiisanainochi.org/?page_id=2742

「大川小学校児童津波被害国賠訴訟を支援する会」
www.ookawa-soshou-shien.jp/

控訴審判決

平時から油断せず、津波の危険性を検討し、適切な避難場所を定め、訓練をしていれば、あの日15時25分の広報車の放送を待たずとも、地震後早い段階で、安全な場所への避難が可能だった。（原告側勝訴）

被告石巻市・宮城県は判決を不服として上告
2019年（令和元年）10月10日、最高裁が宮城県・石巻市の上告を棄却。仙台高裁の判決が確定。

控訴審判決の意義

①具体的危険（大川小に実際に津波が襲来し児童の生命・身体が損なわれること）の予見を前提にした結果回避義務違反ではなく、平時（事前）における津波来襲の危険の予見を前提にした安全確保義務の違反を過失として捉えた。

②平時の安全確保義務違反と津波来襲時における結果回避との間の相当因果関係を肯定。

③安全確保義務発生の基準時点を平時まで遡らせたことで、結果回避行動をとるべき時点を大津波警報発令時とし、津波来襲時の混乱や避難困難性を排除して結果回避可能性を認めた。（p10参照）

※控訴審が予見可能としたのは、2004年に宮城県防災会議がまとめた「宮城県地震被害想定調査に関する報告書」で指摘された「想定される宮城県沖地震」であって、1000年に一度と一般に受け取られている今回の東日本大震災による津波ではない。この点を誤解している人が非常に多い。（下記資料参照）

④学校と教育委員会、自治体間の情報共有、安全確保における協働の重要性と必要性（義務）を認めた
～教育員会現場の教員に負担を押し付けない

⑤ハザードマップの限界を指摘
～見直しと適正化を推進

地震発生後の個々の教師の判断が適切だったかという問題にはふれずに、地震が発生する前の段階で、市教委や学校がなすべき防災対策をしなかったことを違法と判断
児童・生徒にとって、学校は偶然通りかかった場所ではない、教師はたまたま居合わせた大人ではない

資料

宮城県地震被害想定調査に関する報告書　2004年(平成16年) 3月

宮城県沖地震（M8.0）が2003年から30年以内に99%の確率で発生

宮城県沖地震（連動）
津波の最高水位は宮城県北部ほど高く、本吉町で最大約10mである。
浸水面積は鳴瀬町、石巻市、河北町、気仙沼市で大きく、3㎢以上と予想される。

2007年 石巻市教育ビジョン　すべての学校において地域の実情に即したマニュアル作成、見直しを。

2008年 石巻市新防災計画　中央防災会議（2006）をうけ、津波に関する防災対策を講ずべき区域として、大川地区（福地字大正、針岡字昭和、針岡字山下、釜谷字新町裏、釜谷字谷地中、釜谷字川前）を指定。川の越流、決壊は想定内だった。

2009年 学校保健安全法　災害等から児童生徒を守るための管理体制を強調。

2010年2月8日 石巻市教委 市内小中学校長宛文書　同年４月30日までに危機管理マニュアルの作成・改訂を指示。

※再三にわたり防災体制の見直しが叫ばれていた。（見直しによって助かった学校もある）

控訴審レポート

2018. 04. 26　覚悟へのゴーサイン

2018年4月26日、仙台高裁で控訴審の判決が出ました。

今回の裁判にあたり、教室で大川小のことを話してくださった先生が全国にたくさんいると聞きました。

すべての教師は、大川小学校の校庭に立ったとき、寒空の下で大津波警報の鳴り響く中、指示を待っていた子どもの姿を思い、なんらかの責任、後悔を感じています。そして、覚悟をもちます。

高裁の判決は、その覚悟へのゴーサインであると思っています。

教師は、たまたま居合わせた大人ではありません。教師は子どもを守ることのできる尊い職業です。

学校が命輝く場所でありますように。

控訴審レポート

2018. 04. 27　これで変わらなければ

今回の判決で、学校関係者は覚悟が決まったと思います。教師という職業に誇りを与えました。今まで実践を続けてきた方々は、自分たちの信念を再確認したことでしょう。

一方で、今回の判決を「厳しい判決」という言い方があります。教師が忙しすぎて対応しきれない。これ以上教師に負担を強いるのか…云々。

問題はこのような見方、考え方になってしまう状況です。子どもの命が最優先ではない、忙しいから子どもの命は守れない、と言っているようなものです。教育行政はこんなことを言われて、どう感じているのでしょうか？

たしかに、今のままだと、形式的な研修や調査、報告が増えるだけです。「ただ作っとけばいい」という表面的なマニュアルがまた作られます。

学校で何が優先されるべきかが示されました。防災だけでなく行き詰っている教育現場に風穴をあけるきっかけにすべきです。これで変わらなければ、教育委員会は100年変わりません。

控訴審レポート

2018. 04. 29　判決を生きたものに

この判決は、教師に「子どもの命を守り、輝かせる」という誇りを持たせてくれたと思っています。やるべきことをやれば子どもは守れるのです。

一方で「厳しい判決」という報道があります。中には専門家が「高度すぎて対応できない」と語っていたりします。大川小学校で何が起きたかを知った上で、判決文をちゃんと読んだのでしょうか？ **このような論評こそが学校現場を追い詰めていることを知っているのでしょうか？**

2004年から、99％以上の確率で来ると予想されている大津波に備え、危機管理マニュアルを早急に整備するよう何度も求められていたし、2009年の「学校保健安全法」施行の前から県・市では「各校の実情に応じた」マニュアルの整備を求め、「毎年の見直し」も定めています。

防災に限らず、各学校の教育計画は毎年見直し、更新され、教育委員会に提出されています。これまでも求められてきたし、多くの学校では取り組んできたことです。実際に、マニュアルを見直し、書き換えていたおかげで助かった学校もあります。

周りは登れる山だらけの、川のすぐ近くの大川小が、「津波のときは山に避難」とマニュアルに記載

することが、それほど高度なのでしょうか？

大川小のマニュアルは「近隣の空き地・公園」を津波の避難場所としていましたが、近隣には「空き地」も「公園」もありません。

あの日休みを取っていて学校にたどり着けなかった校長先生は、避難所で会った保護者に「山に逃げることになっているから大丈夫」と話しました。見直すどころか、自校のマニュアルを知らなかったのです。

「命を守るため」の備えをしていません。「作っとけばいい」だけのマニュアルです。市教委も、何度も作成・提出を指示しながら一度も点検をしていません。その姿勢が、あの日の判断、行動につながったのです。「やるべきことをやれば守れる」ということは、やるべきことをしなければ守れないということです。

この判決を生きたものにするのは、もっともっと根源的なスタンスに立ち返ることです。

「先生は多忙なので子どもの命を守れません」となっては本末転倒です。

命を守るためのマニュアルか、提出のためのマニュアルか

大川小のマニュアルには「津波」という文言がありますが、マニュアルの作成者は「一般的な災害として『津波』という文言を入れただけ」と答弁。子どもを守るために作成したものではないと認めているのです。

引き渡しのルールも教員間で共有されず、緊急連絡カードは何年も更新されていませんでした。

マニュアルそのものの不備、杜撰さと同時に、その作成過程から見えてくる学校経営の姿勢が、あの日の校庭（意思決定の遅れ、避難方向の判断ミス）につながったのです。

防災に限らず、学校には提出するためだけのマニュアルや計画が少なくありません。問題や事件の度に行われる会議・通達・研修・調査・報告…。そしてまた次のマニュアルが作られます。そういう構造を抜本的に見直すべきです。

参考：「震災裁判傍聴記」フリージャーナリスト　加藤順子

news.yahoo.co.jp/byline/katoyoriko/20160408-00056393/

控訴審レポート　*2018. 05. 04　小さな流れから*

たしかに画期的な判決かもしれません。でもどちらかというと、暗闇にようやく小さな穴が空いた感じです。穴が空けば、光も届くし、流れもできます。

「学校が子どもの命を守るために最善を尽くす」

こんな小さな穴が空くまで、たくさんの時間も、想いも積み重なりました。７年前、いやそれ以前も、それ以降も、多くの方が踏み込んでほしいと願ってきたことです。

１年半前、亀山紘市長と村井嘉浩知事はそろって「亡くなった教員の責任にするのは酷」と控訴に踏み切った。高裁は教員個人ではなく、市教委と学校の組織的な過失へと転換した。控訴の理由は消え、逆に組織全体の責任が厳しく問われる格好となった。

･･･《略》･･･司法が求める水準と現実との間に乖離（かいり）があるのならば、国をはじめとした教育行政は早急に環境を整備すべきだ。石巻市と宮城県は、その先頭に立ってほしい。《河北新報（2018.5.4）より抜粋》

控訴の理由は否定されています。子どもの命を預かる学校・教師の責任は重い、でも、それを支えるのは行政であり、世の中です。この判決を、防災にとどまらず、教育現場の閉塞状態を変えていく契機にすべきです。

交通の便が不自由な場所にも関わらず、連日全国から多くの方が大川小を訪れています。願いは同じです。小さな穴から流れ出した動きが、やがて大きな川となりますように。

控訴審レポート

2018. 05. 07　どうすれば伝わるんだろう

判決は７年かけて、ようやく、ようやく引かれたスタートラインです。日本中の教師が自覚と誇りを持って走り出そうとしています。

ところが、石巻市はスタートしたくないのか、ラインを消そうとしています。

市は、予見不可能だったと語っていますが、では、なぜ再三防災計画の作成と見直しを命じてきたのでしょうか？ 川のそばの学校が「津波が来たら山へ避難」と定めることは高度なことではありません。みんな判決文に書いてあります。

あの日の子どもたちに「自然災害の宿命だ」と、７年経った今も、やっぱり言うのでしょうか。今こそ、会派とか、党利党略を越える時ではないでしょうか？ 石巻市は、子どもの命を守る学校づくりの先頭に立つべきです。

スタートラインは消してはいけないんだと、どうすれば伝わるのでしょう。

控訴審レポート

2018. 05. 15　教師としての誇り

2018年５月10日、石巻市・宮城県が控訴審判決を不服として上告。

「判決は教育現場に過大な負担を強いることになる」という声がありますが、何をもって「負担」と言うのでしょうか？ 現場の先生方はそんなことを思っていません。やっぱり子どもの命にしっかり向き合いたいと、決意を新たにしているはずです。もし、それができない状況なのであれば、これを機会に変えていきましょう。

2014年に出された**大川小事故検証委員会の提言の方がよほど無理難題**だと思います。様々な研修を行い、専門知識を身につけ、詳細なマニュアルを作るよう求めています。それでも足りないので「監視カメラ」や「簡易地震計」の設置も必要だと。カメラがなければ子どもを守れないのでしょうか？

こうした検証委員会の言葉に、保護者としてはもちろん、納得する教員はいないでしょう。

今回の判決で求められているのは、もっともっとシンプルなことです。「学校は子どもの命を預かっている」ということの再確認です。

これを過大な負担と感じるのは、膨大な通達文書とか、細かい報告書やマニュアルの作成、長時間の研修や会議を思い浮かべるからです。

違います。

教育関係者が思い浮かべなければならないのは、笑顔で学び遊ぶ子どもの姿、そして、あの日の校庭です。それだけで「念のため」のギアは上がります。

形式的な文書も報告も会議も、実は求められていないのです。

子どもの命を守り、輝かせる。教師の「使命」であり「誇り」です。

今年も運動会の練習が始まりました。

控訴審レポート　2019. 10. 11　8年7カ月かかって引いたスタートライン

2019年10月10日、最高裁が上告を棄却し、高裁の判決が確定しました。

震災から８年７カ月目で、ようやく引かれたスタートライン。裁判は、ややもすると結果だけが独り歩きしますが、訴訟に至る経緯、そして何を問い、議論した裁判なのかを踏まえ、今後も取り組んでいかなければなりません。

判決は、学校に無理難題を要求したものではありません。９９％以上の確率で津波が想定されるのでマニュアルを見直せという通達を受け、その中に「避難場所は○○の高台」と一行記入するということです。求められるのは、長時間の会議、難しい研修、形だけの分厚いマニュアルではありません。

学校教育が**「子ども」を向いたものなのか、それ以外の方を向いたものなのか**が問われています。大切なのはここからです。子どもたちも見ていてくれます。

控訴審レポート　2019. 12. 01　こっち、こっち

学校のそばに何十人もの子どもの遺体が並べられた事故は前例がありません。４名の児童の捜索は今も毎日続いています。

あれからまもなく８年９カ月という12月１日。守れたはずの子どもの命を守れなかったこと、十分な事後対応ができなかったことの謝罪があり、今後は遺族・市教委の垣根を越えて、詳細に検証を続けることが確認されました。

「はぐらかさない」「ごまかさない」
「途中でやめない」

この間、検証報告、震災遺構としての保存の議論・決定、訴訟、判決確定…様々な経緯がありましたが、ようやくこの地点に立つことができました。

報告の場所はここではないだろうということで、終了後、大川小学校へ向かい、市長・副市長・教育長・県教育長、市教委、県教委関係者が子どもたち、先生方に手を合わせました。

その後、校舎内外を案内しました。「市長さん、やっと来てくれた。こっちが教室だよ」「教育長さん、このホールで歌ったんだよ」「ほら、ここまで津波が」…、いつの間にか、子どもたちが集まってきて手を引いてくれている感覚になりました。

「こっち、こっちだよ」

前日もボランティアの皆さんが清掃にきました。花も植えられています。ガレキに埋もれたあの日から、たくさんの方々の手によって学校はいつもきれいです。子どもたちはそれも伝えてほしいようでした。

８年半前にこの場所で、今日のような話ができたら、どうなっていたかなぁと考えました。「なぜできなかったのか」についても検証し、未来につなげたいと思います。

「子ども」を真ん中にすれば、自ずと歩み寄れるのではないでしょうか。

子どもの顔が思い浮かぶかどうか、子どもに聞かせられるかどうか、そんな基準の話し合いをしていきたいと考えています。

今回の報道などを見るともう話し合いが始まったかのようにも見えますが、まだ始まったわけではありません。そう簡単にいくはずがありません。

でも方向性は見えてきました。

こっちです。

判決報告会レポート

2021.2.21　横並びになって向かう先 ～判決報告検討会にて

2021年２月21日、仙台を会場に「判決報告検討会」が行われ、会場・オンライン合わせて200名以上の方が参加しました。

東京大学の米村滋人先生の基調講演の後、日本大学の鈴木秀洋先生、弁護士、メディア、遺族が参加してのパネルディスカッション形式で、判決の意義を踏まえ、今後どう生かしていくべきか議論が交わされました。

約３時間半、たいへん濃い内容となりました。この判決は画期的とも言われていますが、中身についての理解はまだ深まっているとはいえません。あの出来事を踏まえた取り組みは、10年を経てようやく始まったばかりです。パネルディスカッションで「みんなが横並びになって」という言葉がありました。判決がスタートラインだとすれば、向かう先はみんな同じです。

米村教授は、判決が認めたのは教職員の個人の責任ではなく組織的な責任だとし、「（学校防災は）個人ではなく、協力し合って組織として取り組むべき大きな問題だからこそこのように認定された」と強調した。（朝日新聞記事より）

10年目の校庭で

宮城県内の新任校長研修会が大川小学校で行われ、案内しました。
初めてのことです。

「校長先生は昨日、大川小に行ってきました」と学校で子どもたちや先生に話してくださいとお願いしました。
明日、宮城県内の少なくとも90校で校長先生が大川小の話をしてくれます。
そこからが始まりです。研修が目的ではありません。

10年目で初めてこの場が設けられたことと、50分間動かなかったあの日の校庭は、同じ構図のようにも思えます。
教師が、シンプルに、丁寧に命に向き合うこと、それが十分にできていない状況があるのであれば、どうかすぐ変えてほしいと願います。

あ、校長先生がズラッと並んでるぞ

風の音や工事の音に紛れて、ひそひそ話が聞こえてきます。
明日学校でどんな話をしてくれるでしょう。

2020.11.4

翌2021年の6月15日には、宮城県の新任教員研修が初めて大川小で行われました。
当時６年生だったという参加者がたくさんいました。11年目ってそういう年なんですね。
いい先生になってください。

Message
全国からのメッセージ

「小さな命の意味を考える会」と「大川伝承の会」に
全国からたくさんのメッセージをお寄せいただきました。
前例のないできごとに対して、想いや意見も様々です。
地元の人も遠くの人も、大人も子どもも、
一人ひとりが自分事として考えることで、
あの場所、あの出来事、あの命にどう意味づけをし、
伝えていくのかが浮かび上がってくるのだと思います。

この四葉のクローバーは大川小学校跡地の校庭で見つけたものです

大切なことをたくさん学ばせていただきました。今後生きる上で自分と自分の大切な人を守るために、ずっと心に留めておきたいと思います。（東京）

子を持つ親として、何で？何で？と思う気持ちは、本当に募るばかりです。子どもにとっても何か感じて考えるいい機会になったと思います。防災についてなあなあにしか考えていませんでしたが、真剣に家族で話し合ってみたいと思います。（岐阜）

「小さな生命の意味を考える会」「大川伝承の会」のスタンスにひどく感動しました。ここで起こったこと、その後の行政の在り方など、外の人間では想像し難い体験をされているにもかかわらず一緒に共有していこうという心構えがすごくありがたかったです。様々な論点がある中で、教育に関わろうとする者として、子どもたちの生命を守る立場になるということを改めて認識させていただきました。（三重）

大川小学校のことはテレビでしか知りませんでしたが、今回実際に訪れ、話を聴き、胸にこみ上げてくるものがありました。救えた命があったこと、それなのに救えなかったこと、しっかりと心に焼き付け、このようなことを起こさせないために、伝えていきたいと思います。（静岡）

何度来ても新しい発見があり（今回は初めて実際にどんなに寒かったのかよくわかりました）、勉強になります。私も「伝える」ことについて引き続き考えていきます。（宮城）

つらい経験を他の人にさせないために活動しているという話、未来を見すえたお話を聞かせていただき、大変心打たれました。私は実家が宮崎で南海トラフ地震が起こるといわれています。他人事じゃないんだなと思いました。（東京）

貴重なお話を伺う事が出来ました。ご自身の辛い体験から真に迫る震災当日の出来事をありありとお話し頂き、心に響きました。 緊急の際の行動では、マニュアル等に縛られる事なく、現場（指揮官）の適切な判断が優先されるべきと痛感させられました。記憶の継承もとても大切な事ですので、後世に語り継ぐ活動を、是非直接の体験者として続けて頂ければと思います。遠方より応援させて頂きたいと思います。（熊本）

当時の真実を知れてビックリするのと同時に、助かった命があったこと。悔しくて仕方ありません。子どもたちこわかったね。やすらかに天国であそんでいてね。（千葉）

たぶん行政主導では伝えていただけないであろう話を聞くことができたと感じた。民間の伝承の重要性を感じることがで きた。（岩手）

被災地を巡ったり話を聞いたりすることが全くの初めてだったので、大川小を見た時半分放心状態でした。テレビやインターネットでなんでも調べられることは便利なことですが、知ったかぶりで本当の理解には届いていなかったと思います。まずは身近な人に私が見聞きしたことを伝えることから始めたいと思います。（東京）

約７年ぶりに来させていただきました。初めて来たのは大学４年生の時で、小学校を見た時、言葉になりませんでした。今日見てからもその時から時が止まっているように感じました。３～６年生校舎の２階で、風になびいた草が子どもが手を振っているように見え、その瞬間子どもたちの姿が見えたように感じました。校舎を遺してくれたこと、岩手の元学生としてうれしく感じます。生々しくすばらしいお話ありがとうございました。（東京）

学校という組織の中で意思決定が遅れたことは、まさに今の学校教育の隠れた大きな問題だと思いました。学校は児童生徒の命を守ることが大前提のはずなのに、その組織として機能しないことはあってはならないことです。私は、まだ教育について勉強途中ですが、自分の組織が大切なことを忘れていないか、一番大切なことが中心にあるのか、もう一度考え直したいと思います。（東京）

現地で話をお聞きした息子が「子どもたちの命を守れる教師になる」という目標に向かって頑張っています。これからも私たちに命の大切さについてお話を聞かせていただきたいと思います。（熊本）

大川小の前に立ってはじめて「津波はこんなに壊してしまうのか」と思いました。当時、同じく小学生だった私たちが大学一年の年齢まで成長した今、８年前に止まってしまった命を、数字ではなく実感として感じることができました。
2011 年 3 月 11 日、14 時 46 分より前、大川小学校にも変わらぬ日常があったことを忘れてはいけないと思いました。震災で多くの命が犠牲になってしまったこと、そのことはもちろん忘れてはいけないですが、大川小学校をかわいそうな場所、悲しい場所としてだけ思い出してはいけないと思います。同じ場所で、かつて楽しく遊んだこと、生きていたことを津波の記憶で覆われてしまうことこそ、悲しいことなのではないか、と感じました。（埼玉）

亡くなったお子さんや先生方がどんな思いをしたのか私には想像できないし、できたとしてもそれを分かった気になってはいけないと思います。でも、あの日あったことを忘れないこと、少しでも正しく伝えることのお手伝いならできるのではないかと、勝手ながら思いました。私にできることや変えられることは少ないけれど、今回直接現場に行き、お話を聞いたからこそ分かったことを、まずは周りに伝えることができたらと思います。（愛媛）

お話を聞いて、多くのことを感じましたし、分かることが出来ました。それでも、まだ足りないと思いました。もっと考えていかねばならない。多くの命がなくなったことを忘れてはならず、その命に意味を与えることが出来るのは私たちであろうし、意味づけたいと思いました。学校のシステムの問題や報道の問題、心の復興など多くの問題がまだまだあるけれど、また考えることに行き詰まったら、大川小学校を訪れようと思います。（愛媛）

震災の辛さに蓋をして５年が経ち、思いを言葉にすることはありませんでしたが、このままではいけないなと思いました。人の命を預かる仕事をしている以上、これからも間違いのない判断と、危機管理に努めて教育に携わっていきたいと思っています。（宮城）

職業ぬきに子どもをもつ親の視点でみると、行政の対応に疑問を抱かざるを得ない。大事な考える場であると思うし、大切な会だと思う。仕事上で見ると、厳しい目線で政治に向き合う報道姿勢を改めて考えさせられた。（東京）

貴重な勉強の場をありがとうございます。まだ経験の浅い記者ですが、このような場を重ねて少しでも有用な報道につなげたいと存じます。（宮城）

３回目ですが、このような会で検証を続けていること、様々な複雑な思いの中で、真実を伝承していくことの大切さ、大きなうねりにしていきたいですね。当事者でない私たちだからこそできることがあると思います。（山梨）

そこに子どもたちがいたことも、そこに大津波がおしよせたことも、正直、想像できない未知の世界があった。ただしっかりとその事実は残っていて、あれが起こる前は普通の日常があったと思うとぞっとする。震災前の学校を語り続けることは、子どもたちがそこに生き続けることにつながると思った。（東京）

当事者の方々のお話を聞くことができ、大変参考になりました。被災者でなく、被災地の現在の住民でもない、遠い距離の場所に住む者がどうアプローチすればいいのか、疑問が残りました。「県外の一般市民」ができることはないのか（忘れないということだけでなく）。今後ともお話を伺う機会があれば幸いです。（山梨）

魂のお話でした。もっともっと話し続けてください。お空に逝ってしまった子どもたちの分まで、語れなくなってしまった子どもたちの分まで語り続けてください。（福島）

事前に大川小のことは学習していたのですが、実際目にしてみると、やはり違うものがありました。「過去の事実」として知っておくのではなく、ここから何を学ぶのか、自分たちには何ができるのか、何をすべきなのかを、しっかり考えて行かなければならないと思いました。（東京）

２回目の参加です。初めて大川小学校の校歌を聞き、子どもたちのことがより身近に感じられました。前回もでしたが、今日も快晴で子どもたちが見守ってくれているのかなと思いました。（宮城）

「水俣、福島、福知山線事故、七十七銀行など」と共通の問題として考えつづけていきたい部分と「大川小学校→石巻市→宮城県→国」の中で何でこんなことが起こったのだ、と、個別の問題として理解しがたい怒りと疑問を感じる部分があります。「恕すと許すのちがい」ものすごく大事な話と思いました。（熊本）

今まで、TV や写真などで大川小で何があったかを学んで勝手に知ったような気になっていたけど、今日実際に見学し、お話をうかがって、あの日あの時何が起こったのか、その事実が前よりも重く、本当にあった事実としてようやく分かったような気がした。子どもたちがどんな気持で逃げて、親たちがどんな気持ちで子どもたちの遺体を発見したのか考えると本当に心が痛んだ。（東京）

大川小のことをはじめ、3.11 自体の風化が著しい。これをどう食い止め、記憶と教訓を全国全世界と次代に伝えていくか。カギの一つはネットワークの構築だと思う。そのために何が必要なのだろうか？（東京）

毎年、この時期に来させていただいています。保育士をしているので、想定外の震災が起きた場合、子どもたちの命を守るためにできることは…と毎回考えさせられます。普段からの備えや災害に対する意識、知識を高めていく大切さを学ばせていただいています。（埼玉）

初めて津波の被害を受けた場所に来ました。一度も見たことがないのに、子どもたちがグラウンドで遊んだり、野球の練習をしたりする姿が想像でき、すごく切ない気持ちになりました。僕のいとこたちもまだ小さく、彼らが同じ被害を被ったと想像すると涙が出ました。経験したことがない僕らにも伝える必要がある内容でした。（宮城）

“子どもの命が何よりも重い”というとても分かり易い理(ことわり)が、より多くの関係者に共有されることを望みます。（宮城）

海から４km 近くも離れていたのに。時間もあったのに。“ここに登っていれば助かった”のに。私は涙が止まりませんでした。「子どもたちが生きたかった明日を生きている」大川小学校で聞いたこの言葉は真っ直ぐ私の心に響きました。（兵庫）

２回目ですが、前回は見ただけだったので、今回お話を聞いて、当時の様子や津波の被害を受ける前の大川小学校の様子をしっかり聞けてよかったです。私は、教育学部です。先生になるかどうかはまだ決めていませんし、もしかしたら教育行政の道に進むかもしれません。どちらにせよ、大川小での出来事はしっかり考えていかなきゃ、と思います。津波以外の災害にも必要なことが学べるのではと思いました。また来たいです。（宮城）

お話にとても心を動かされました。私は弁護士を目指していますが、今回の訴訟のお話を聞き、純粋に真実を知りたいと思っている一般市民の味方となれる弁護士になりたいと思いました。（宮城）

何度目かの大川小訪問でしたが、こんなに詳しくガイドしていただいたのは初めてです。新聞記事もバインダーにファイルして、孫の代まで記録を伝えたいと思っています。（宮城）

広島は水害が多い場所です。防災のあり方をいつも考えさせられます。（広島）

同じ子どもを持つ母として、今日聞いたお話がとても心に残りました。大川小のみなさんが精一杯がんばって日々過ごされた事、みなさんのことは忘れません。（岐阜）

見るたびにあの日の悲しみや悔しさを思い出してしまうであろう大川小学校の校舎を、あの形のまま残してくださっている町の方にはすごく感謝しています。確かにあの校舎を遺すのには勇気がいるし、とても辛いことかもしれないけれど、私はあの校舎で笑いあって毎日を過ごした子どもたちの為にも残してほしいと思います。（兵庫）

サークル活動としてボランティアをしている現在、県外から移住して来た私は、復興の進んだこの土地で自分のできることを見失いかけていましたが、本日の話を拝聴し、現在でも当時の記憶や伝わらない真実に苦しんでいる人がいることがわかり、胸を締め付けられる思いをした一方で、自分自身にもなすべきことがまだあるのだと実感しました。これからは、地元の方々の話に耳を傾け、真実を知り、これからの災害対策で守れる命をひとつでも増やせるよう、亡くなった方々の「魂を無駄にしない活動」をして参りたいと思います。とても勉強になりました。（宮城）

何回も訪れているのですが、毎回違ったお話、違った発見があって、すごく勉強になります。愛知は、大きな地震が来ると言われているので、この学びを地元に還元したいです。（愛知）

一年前、高校の教育旅行で、お話を伺い、強く印象に残ったため、大学生となった今、また伺わせていただきました。将来教育行政に関わりたいと志している者として、この問題はしっかり考えていきたいと思います。（福島）

大川小のことを全国の人に知ってもらいたいと今日の話を聞いて思いました。ぼくもいつかふっこうを手伝いたい。また大川小のお友だちに会いに来ます。宮沢けんじと待っていてね。（宮城）

生の声がとても心に刺さりました。色々なメディアで伝えられるニュースや事実を見聞きしているのとではやはり響き方が、納得度が違うなと実感しました。地元の方々の心苦の上の今のたくましさを応援しています！（東京）

私は神戸で災害団体に所属しているのですが、神戸で1995年に起こった阪神大震災が、若い世代には関心が低くなっていることを強く感じています。今日この場に来てお話をお聞きできたことを大切に地元にて自分ができること、子どもの命を守るためにできること、考えなければならないことにちゃんと向き合おうと強く思いました。（兵庫）

今回はじめて大川小を訪れ、山を実際に見ることができて、やはり「ここに避難していれば」と思いました。多くの人が「我がこと」として捉えられるように、津波について、平時のコミュニケーションの大切さについて考えること。教育現場でも、このことを隠さず、見つめ、検証していくべきだと強く感じます。
（宮城）

卒業生のお話を聞いて大川小学校の被害を教訓として残していくべきだと再認識した。大川小学校の跡地が「防災のランドマーク」として未来につながっていくことを切に願う。（東京）

多様な声、それぞれの立場を伝えきれないと力不足を実感する。何を取材し、何を伝えるべきかを考える機会として、今後も問題意識を共有したい。（宮城）

初めて裏山とかを見せてもらえて、教室のサッシがゆがんでたり、ボロボロになっているのを目にした時から涙が止まりませんでした。子どもたちの魂の平安を心より祈っています。（宮城）

報道などではなかなか聞けない話で、大変勉強になりました。ご家族を亡くした方の気持ちを少しは分かったように思いました。特に、単に悲しんでいるわけでない点が。（宮城）

大川周辺の方々、ご遺族の方々とディスカッションさせていただいて、津波が来る前の大川のことを、ちゃんと知っておくのが、避難の仕方ひとつとっても、適切だったかどうか判断するのに重要だと改めて感じた。そういう、ある程度、事実に近づいた地元の認識をあいまいにする役割しか果たせなかった専門家の責任は重いと思った。（宮城）

大川小に関して、色々な番組や記事を目にしますが、当時の様子や状況を語れるご本人のみなさまの直接の話を聞きたいと思って本日は参加しました。石巻に住んでいる以上、やはり人に聞かれるので、私も今日の話をメディア等のフィルターなしでお話しできるように努めます。（宮城）

「未来に向けて今後どうするのか」というテーマも取り上げてほしいと思います。コンクリート建物の耐用年数は50～100年です。広島のようにシンボルにしていくには国の予算が必要になります。私個人としては、200～300年後の為に「どう伝えていくのか？」を考えていきたいです。いつか校舎も生き残った人々も無くなります。しかし200～300年後の未来にも伝えていかねばならないと思っています。（宮城）

もし、自分に子どもができたとき、3.11の話をしたいと思いました。多くの人にもっと知ってもらいたいです。（北海道）

救える命を救えなかったこと、亡くなった子どもたちはもちろんだが、先生方の後悔もあるのだろう。（東京）

言葉にならない、との言葉が全てを伝えてくれました。避難についての何故？が尽きません。少しでも前に進むことを願います。（東京）

卒業生の学生さんのお話を直接うかがえたのが貴重でした。また、上のたたきもはじめて登り、印象に残りました。模型もすごく分かりやすく、住んでいた方の思いも伝わります。（宮城）

真実を求める事も大切だが、なぜ真実が明らかにされなかったのかを検証する必要があると感じました。人により意見に差があるのはあたりまえだとは思う。（宮城）

報道する側の取材力、継続力がとても大事になる。一方で、報道を見ていない人も少なくない。受け取る側の意識の問題というのもある。きっかけは何であれ、まず現地に足を運んでもらえるようになれば、とも思う。（宮城）

同じことを繰り返さないためにも、きちんとうやむやにせず、事実を振り返ることは大切なことだと思います。学校のあり方にも問題を感じます。声を出していきたいと思います。（宮城）

私たちのように遠くに住んでいる人やこれから生まれてくる人々は、なぜ大川小を遺すに至ったのかについても考える必要はあるし、知っておかなければならないと感じました。（愛媛）

非常に心に迫りました。震災は神奈川で経験したので、大川小学校のことも、ただ単に教師の避難行動がうまくいかなかった学校という認識でしたが、今回の話で考えが変わりました。防災への意識を改めようと思います。貴重な経験でした。（宮城）

「大じょうぶは二種類ある。災害が来ないから大じょうぶと、災害が来ても大じょうぶ」という言葉が心にとてものこりました。ぼくはちゃんとそなえて「災害が来ても大じょうぶ」の人になりたいです。そして、そのことをみんなにつたえていきたいです。（熊本）

お話を聞く事ができて、小学校という安全な場所で子どもたちが亡くるような事があってはならないのだと改めて強く思いました。うちの子も当時小学６年と高校３年で、千葉ではありましたが、地震にこわい思いをしたと、今でも言います。
私の自宅は東京湾内ではありますが、川に近く、今日の事を教訓に災害がおきたら的確に行動できる様にしたいと思います。（千葉）

小学生の子どもが２人います。今日聞いて感じたことを親として伝えていきます。（岡山）

どんな大人に育てていくか、教師がもっと考えていくべきだと実感。一人一人が責任をもって自分の命を全うすることの大切さを感じました。 今後とも一緒に考えさせていただきたいと思います。（千葉）

実際に訪ねてみて、震災のすごさ、被災者の皆様の悲しみ、犠牲になった子どもたちの無念の重さを肌に感じました。教育に携わってきた者として「判断と行動」の大切さを新たにしました。（東京）

もう一度子どもたち・若者が住みよい大川地区に戻れたらと思います。どうか皆さまのお力で知恵を貸してほしいと切に願っています。（宮城）

複雑な問題で、部外者の自分はどう関わっていいか分からないが、子どもの生命を守る社会にするにはどうしたらいいのか、この会に関わる中で考えていきたい。（宮城）

自分の地域も土砂崩れなどもある可能性があります。今後皆さんの辛い思い、子どもたちの死を無駄にしないために、しっかりと防災に取り組みたいと思います。（静岡）

大川小学校のことは今まで全然知りませんでした。震災についてのニュースをあまり詳しく見たことがなかったからです。自分のことを愚かだと思いました。自分の国で起こったことなのに全然知ろうともせず、本当に愚かだったと思います。今回たくさんの人から 3.11 について教えていただきました。このことを私は家族に伝えました。そうすることで、この機会に教えていただいたことを忘れないようにするためです。（兵庫）

３回目の訪問でしたが、２度とも個人で伺っただけでしたので、廻りの住居、町が、家があったことを知らず、今の説明を受けて初めて生活の様子、当日の状況をはっきりイメージすることができました。助けられなかった多くの命の尊さを思うと、残念で仕方ありません。命の大切さをしっかり知り、またサバイバル危機管理能力教育の大切さを改めて想いました。孫たちに、友人たちに、今日知ったことを語りたいと思いました。（宮城）

私は長年全国の数カ所の施設で管理者をしてきました。危機管理については人一倍気をつかってきたつもりですが、東日本大震災に直面し、今日のお話も他人事とは思えませんでした。今後も仕事の上で他者に自分の判断を伝えたり、場合によっては今すぐ一緒に行動したり、ということがあると思いますし、そうではなくても緊急時に自信をもって行動し、まわりの他の方にも行動を促せる自分になりたいと思っています。生きていく上で色々な後悔はありますが、他者の生命にかかわる後悔というのは自分もしたくないし、他の人にもしてほしくないです。（宮城）

今回はじめて現地を訪問し、たくさんの学びをいただきました。大川伝承の会のみなさまのこの活動のおかげで、静岡の人間も何が起こったのかを知ることができました。今後の災害で命を守るために今日の経験を全ていかします。ぜひ今後も続けていただきたいです。次回は私の小学校４年の子どもも連れてきます。
（静岡）

現地の見学から座談会まで、大変お世話になりありがとうございます。ご遺族の想いに沿った遺構保存と伝承のために、第三者にできることは何か、深く考えさせられました。個人的には、当事者のみなさまと行政をつなぐ、コーディネーションや語りのプロトコルを分析すること、子ども、教員支援などは中長期的にできそうな感じがいたしました。今後ともよろしくお願いします。（大阪）

私は今まで、そういう空気があったせいか、あまり東日本大震災のことを話しませんでした。でも、災害は伝えなければただの悲しい出来事で、伝えることで初めて役に立つことを知りました。亡くなった人の命を無駄にしないためにも伝えていこうと思いました。
（宮城）

５度目の訪問ですが、自分の想像と実際のお話を聞くのとではまったく異なる理解となります。教員として根本的に考えさせられる思いでした。（福島）

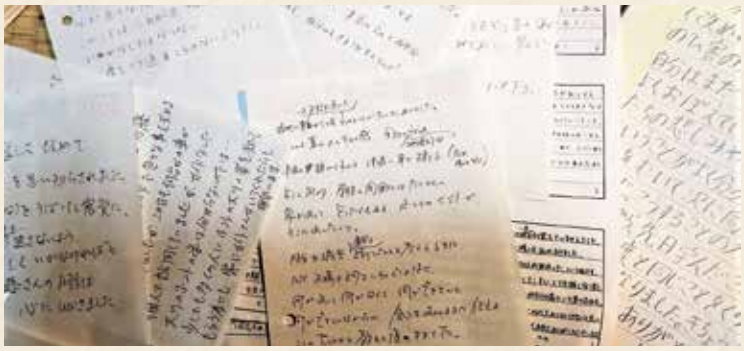
私たちマスコミは３月にしか大々的には来県せず、申し訳ない気持ちでいっぱいです。同じようなことが二度と起きないよう、少しでも紙面を通じて伝えていくことができたらとのみひしひしと感じます。（滋賀）

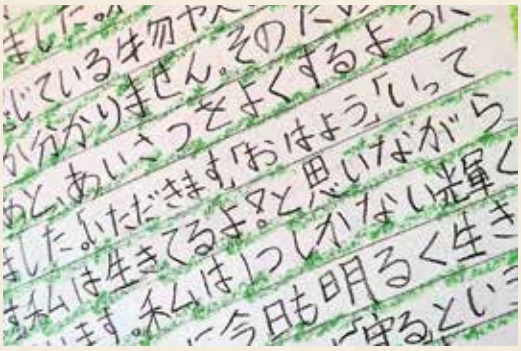
弱い者の立場に立って最悪の事態を見越して行動しなければならないと再認識します。他人事とは思えない、いつまでも忘れてはならない出来事だと思いました。
（福島）

想像以上の津波だと言いながら、どうして山に逃げなかったのかと本当に残念です。今まで TV や写真だけで知っていましたが、実際にこの地に来てお話を聞くことが出来、今後絶対にこのようなことがないよう祈るばかりです。（岐阜）

６年生が一度裏山へ向かいかけたのに、戻されたという話は衝撃でした。津波に流された当時５年生の彼の話はとても貴重だと思いました。裏山に登ってみた時、たったこれだけのことがなぜチームとしてできなかったのか？ 本当に残念です。自分も発信していきたい。
（宮城）

この事件を矮小化してはいけないとつくづく思います。全ての親が「敗北」と捉え、生命主義に立った価値観の構築が望まれます。（福島）





遺族はそれぞれ様々な想いを抱えているということを改めて教えていただきました。「改めて」という言葉を使ったのは、私が知らず知らずのうちに遺族に対する勝手なイメージを作っていたのかもしれないと感じたからです。印象的であった言葉の一つに「報道は小さい窓」という言葉があります。報道の裏側、その奥には見えていないものがあるのだということを、今回、現場に立ち、様々な方とお会いして実感しました。（愛媛）

今回の震災で問われている「組織としての防災」は、専門家でしか答えられないような内容ではなく、防災のルールを徹底しましょう、ルールを知り、まずは教える立場の先生が最前列で行動できるようにしましょう、そういった「当たり前にできるはずの教育体制」だと思いました。（愛媛）

私は、生きている今を精一杯頑張ろうと思いました。そして、防災は本当に大切だと思ったし、大川小学校の話は心に深く刻まれました。大人になっても今日思ったことを忘れたくないです。（石川）

私自身、優柔不断であることが悩みだったのですが、それは物事に対して真剣に考えていないからだと分かりました。だから、これからは友達の判断なども視野に入れつつ、物事の本質をとらえて良かったと思えるような判断を続けて行きたいです。（東京）

何があって、何がなくて、何ができていて、何ができていなかったのか、全てありのままに伝えることの大切さを教えていただきました。（宮城）

話が分かりやすく、実態がよく理解できた。今からスタートというようなことを仰っていましたが、本当にその通りだと思いました。自分のできることをしていきたいです。（宮城）

今、自分は何をすべきか、何を伝えていくべきかを考えた。忘れることなく、後世に伝えること、そして、いつ起きるか分からない大震災に備えること。それが被災することの無かった僕達が今すべきことなのではないかと思う。（東京）

「津波は…」「地震は…」ということだけではなく、「これからどういうことをすればよいのか」を教えていただいたと思います。
僕は熊本地震のときに「ここは揺れなくてよかった」などと他人事でした。話を聞いて、自分が恥ずかしくなりました。僕は「自分のできることは全力でやろう」という目標を立てました。（栃木）

正解のない問いや課題に対して、考えを持ち、判断し、行動できる自分でありたいし、そういう力を持った生徒を育てたい、力をつけてやりたいと思った。（島根）

学校に通ってくる一つ一つの「命」の重みを感じさせられました。「もしも」のときに、その命たちを全力で守るという使命感を強く持ち、子どもたちと楽しい笑顔あふれる一日一日を大切に過ごしていきたいと思いました。（福岡）

「道は続いている」という言葉が心に響きました。地震や津波などがあっても、自分の生きている意味が分からなくても、辛いことがあって進みたくないときがあっても、今は見えていなくても、必ず道は続いているのかなと思いました。（三重）

大学時代に地震や津波、防災について研究しておりました。防災の観点から見て大川小学校の位置は津波が到達すると推測十分であると思いました。そのマニュアル作りの際に「本当に命が守れるのか？」という視点ではなく「言われたから作る」という学校の体質を感じました。（東京）

たくさんのことを知り、生きていることの大切さを改めて感じることができました。私がふだん当たり前に感じている物や人も、いつ消えてしまうか分かりません。私はお話を聞いた後、あいさつをよくするようになりました。「おはよう」「いってきます」私は生きてるよ！と思いながら言っています。
私は一つしかない輝く命を守るために、今日も明るく生きています。そして自分の心に「守る」というギアをつけていきたいと思います。（宮城）

震災当時、愛知県の小学６年生でした。卒業式の練習中に教室が揺れ、校庭に避難。そこからの記憶はほぼありません。テレビで津波で流されていく様子を見たのが次の記憶です。私は災害で身内を亡くす経験をしていませんが、この校舎が残っていることで、少しその気持に寄りそえた気がしました。（愛知）

共感し、哀れまれることが目的ではなく、教訓として活かしてほしいからと仰っていたのが印象的でした。（東京）

震災を経験したから変わるのじゃなくて、しなくても変われるようにという話を聞いて、私は「変わりたいな」と思った。自分が今できることを精一杯することが防災へつながるのではないかと思う。（群馬）

10年ほど前、縁あって長面と釜谷に来たことがあり、地域の人たちと話をしたり、子どもたちが元気に遊んでいてしっかり挨拶もあり、とても懐かしく思い出しました。話を聞いて、子どもたちが勉強している様子や、校庭で遊んでいる様子が見えるような気がしました。これからも忘れないでいきたいと思います。
（宮城）

自分（卒業生）にとっては遺構ではあるが母校だ、というお言葉が印象的でした。私も命の意味を考え続け、そして人を救える人間になります。（宮城）

テレビ番組ではドラマチックに報道しています。当たり前だと思っていることが、本当は有り難い（有ることが難い）ということはわかっているつもりですが、腹の底では分かっていないどこまでも自分中心の私だと思うばかりです。（熊本）

「いつか」やるとか「誰かが」やるだろうとか、その「いつか」や「誰か」は、いつ無くなるか分からないなと改めて思った。今まで自分も使っていたけど、その「いつか」や「誰か」はすごく無責任だったなと、本当に強く思った。だから「いつか」とか「誰か」ではなくて、受け止めて、向き合って「自分」から行動出来たらいいなと思った。（東京）

当時、高校２年生でした。あの時の怖さ、ショックを思い出しました。幸いにも私は今、宮城のためにいろいろできるところで働けているため、今日の大川小のこと、当時の想いを大切にしながら、仕事をしていこうと思います。子どもたちや先生方が、私たちを「見てください」と招いてくれたのかもしれないと感じました。（宮城）

大川小学校は未来を拓（ひら）く場所です。「未来を拓く」という言葉は大川小の校歌に、また野外ステージの壁にも刻んである言葉です。私にとってこの場所は未来を拓いてくれた場所です。きっとこれからも誰かの、日本の、未来を拓いていく場所であり続けます。この場所に行けたことに、そしてお話ししてくださったことに感謝です。（山形）

今日、9年経つ日にやっと宮城へ来ることができました。「防災はハッピーエンドでなくてはならない」という言葉、本当にそうだなと思いました。起きてしまったことからしっかり学び、次へとつなげる。命が消えてしまってからではもう取り返しがつかないのだから。4月から教師になります。私一人では微力ですが、防災の大切さを伝えられるように頑張りたいです。（岐阜）

昨年、新任研修で大川小学校でのお話を聞かせていただきました。兵庫に帰って二学期になり、宮城に行ってきた自分ができることを考えたとき、東日本大震災のことや、家族が元気でいることの大切さについて子どもたちと考えたいと思い、授業をすることにしました。子どもたちにとって少し難しい内容であったかもしれませんが、多くの子が友だちと話しながら考えることができていたと思います。「一日一日を大切に生きようと思った」という感想が心に残りました。（兵庫）

話を聞いて「今までとは違う」と思いました。今まで聞いたお話は、地震・津波の恐ろしさを教えてもらって「怖いんだ」という感情が生まれました。でも「怖いんだ」で終わっていて他人事のように考えていたと思います。今日はこれから自分がしなければいけないことがはっきり分かってよかったです。（高知）

大川小学校のことはニュースでよく見ていたので、あの日に何があったかはある程度知っているつもりでした。ですが、現場でお話を聞き、気づかされることが沢山ありました。生きたいと願っても叶わなかった方々がいる事実を目の当たりにし、自分の生の意味や、周りの大切な人を守るために何をすべきかを、あの日以来考えています。（栃木）

「防災は助かるためのもの」「命を想い判断をする、行動をする」という言葉、忘れません。将来、自分一人ではなく家族や町の人、仲間を守る立場になったときには、まずこの言葉を思い出して、何から行動ができるか考えようと思います。また、私の周りには、大川小学校について語り部さんからお話を聞いたことがある人は少ないため、まず今できることとして家族や友人に今回のお話で自分が感じたこと、そして、「未来を拓（ひら）く」小学校であるということを伝えようと思っています。（石川）

看護師を志す学生たちにとって、必ずいつか向き合うことになるのが「生きる」ということです。自分自身だったら…。私たちにできることはなにか…。自然の中に生かされている者として、限りある命を生きる者として、それぞれに何かを感じられることができ、目標に沿った、またはそれ以上の研修にすることができたと考えています。（埼玉）

「大切なものは常に見えにくい」心に残った言葉です。関わってくれている全ての人に感謝し、精一杯生きていきます。（長野）

子どもたちが大きな津波を目の前にしてどれほどの恐怖の中で亡くなっていったのか。我が子を自分の手で掘り起こした親の気持ち。恐ろしい夢のようなことが現実に起こっていたことを信じたくありません。しかし、実際には老若男女問わず亡くなった方が大勢いて、救えるはずだった命も多くあったことを知りました。今回、大川小学校での出来事をお伺いできたことは、私が今後生きていくうえでも大きな学びとなりました。教職を目指す身としても、常に心に留め、小さな命をみんなで守れる教員になりたいです。（長野）

私が震災で失ったものはほとんどない。当時ラジオを聞いていて、死者が何名、行方不明者が何名と言われても当時の私にはとても多い人数がいるとざっくりとしか認識していなかった。あくまで数字としてしかとらえていなかったからだと考える。
電気が復旧してテレビを見た。広い海の上で家や車など多くのものが混ざった水が押したり引いたりしていた。映像や写真を何度見ても何が何だか分からなかった。今までずっとそうだった。そして、私はたいして被災していないのに、津波の映像を見るのが嫌で、その報道をされるのも、被災地と呼ばれることもいやだった。見せられたら黙って見ていたが、どうして自分は見たくないのか分からなかった。多くのことがなぜだか分からないままだった。
今回の事前学習でも、様々な数字が出ていた。自分何人分の高さ。50m 走から考えて何秒で到達するところ。具体的に考えていったものの、それがどういう意味なのか、分かったような気になって結局分かっていなかった。今日現地でお話を聞いて、私の多くの疑問が解決し、新しく知ることもできた。
天井についた津波の跡、根元から折れた渡り廊下の柱、残された名前のシール、子どもたちが描いたステージの壁画。私は今日まで大川小学校に行ったことはないし、知っている友人だっていないけれど、子どもたちの姿が浮かんできて「そこには直前まで日常があった」ということを強く感じた。
私は「分からないままだった」のではなく、考えようと、向き合おうとしていなかった。最後のお話を聞いてこのことに気づいてから、私はわだかまりが消えてとてもすっきりした気持ちになり、恥ずかしく、悔しく、ショックだった。
救急医療・災害医療に携わりたいなどと口では言い、活動に参加しながらも、本質的な部分は全く見ることができていなかった。震災を受け止め、向き合った「つもりでいた」に過ぎなかった。
私が今回養護教諭の目線で考えたことは、養護教諭、つまり学校に勤めるものは、子どもたちの命を預かっているということ。命を預かるとはどういうことか。命とは何か。中でも強く考えさせられたのは「学校とはどんな場所であるべきか」ということである。
見学に行く前の私が聞かれたら「子どもたちが安心安全に遊び成長できる場所」と答えたと思う。今の私からするとこれは不十分である。「いつ何が起きても安心安全」な場所でなければならない。想定外のことはこれからもたくさん起きるだろう。しかし、その想定外の中で子どもたちの安全を第一に考え、さらに不安定になった心にも寄り添えるくらいの余裕を持たなければいけない。
学校に携わるすべての人が、みんなで「命を守ること」について考えるべきだと思う。（宮城）

語り部さんからお話を聞かせてもらうのは初めてでした。震災を覚えている人たちが生きている間は、あの時の事を忘れることはないと思います。だけど 50 年後、100 年後にまで伝えていく事がすごく大切で、とても意味のある事なんだと強く思いました。また、日本でも世界でも自然災害が至るところであるけれど、自分や身の回りで起こってみないと現実味がなかったり、時間が経つと薄れてしまう気持ちだったり、そういう気持ちになりがちですが、自然災害の恐ろしさや心得を再確認するためにも定期的に語り部ガイドに参加しようと思いました。（神奈川）

若者が参加を始めたことは、心強い限りです。ジオラマも、理解を大きく助けるものと感じました。終了後に参加者同士で話合いができる場をあらかじめ用意することが必要と思いました。（東京）

日本社会の病理の根深さが阻んで真実が明らかにならないと感じます。日本社会を構成している 全ての人びと（大人も子どもも）が、他人ごとではなく、自分ごととして大川小の問題と向き合わなくてはならないのだと思う。そうでないと、また新たな悲劇が繰り返され続ける。（宮城）

「しかたがない」自分もよく使う言葉です。しかし空気を読み、周囲に合わせていたら、非常時に子どもたちのことを守れない。「守る」ということの意味を突き付けられました。自分も幼稚園の子どもたちを守れるように「しかたがない」という言葉は二度と使わないようにしよう。そう思いました。（福島）

大川小学校のお話を聞くのは今回で３度目となりました。どれだけ回を重ねても、感じる胸の痛みは変わりません。それは震災当時、私が小学５年生であったからかもしれません。ここに自分がいたかもしれない。小３の妹がいたかもしれない。自分事として考えること、昨年「防災士」の資格をとりました。今年はこれを実際の行動へつなげていきます。また、来年も伺いたいと思います。（石川）

（４年前に）大川小学校を訪れた時のことは、今でも鮮明に覚えています。あの日のまま時が止まり、ひどく冷たい場所なのに、子どもたちの息づかいが残り、少しだけ温かくも感じました。
大川小が今でも私の記憶に残り続け、建物がただの風景ではなく、震災を如実に伝える存在として残っていることは語り部の方々の言葉があるからこそだと思っています。どんな恐ろしい爪痕が残る「物」でも、それを伝える人と受け取る人の意識抜きには、意味がなくなってしまうのではと思います。
この４年間で、幾度となく「想定外」という言葉を目にしました。あと何回、想定外を重ねれば人は想定内として対処できるようになるのだろうかと思いつつ、しかし、災害において想定内はあり得ないとも思います。そんな私たちが唯一頼ることができるのが災害の前例です。震災と子どもたちに真摯に向き合う姿に励まされています。（栃木）

当時の子どもたちの不安・教師の方々が残した後悔・生き延びて今を過ごしている方々の気持ちなど、多くの方の感情に思いを馳せる一日となりました。（長野）

大川小学校を訪れるということで、初めて研修旅行に参加しました。実際にその場に立ち、見て、話を聞き、裏山を歩くと、報道では伝わらなかった様々なことを知ることができました。震災から８年半。命の重さを改めて心した日になりました。（宮城）

自分の住んでいる静岡県も地震が起きると言われていて、地震が来たら津波や噴火も起きると言われています。今回のお話を聞き、判断と行動が何よりも大切なことだと感じました。辛い中だと思うけれど、ご遺族の方や被災した方から実際に話を聞き、現場を見ることで、ニュースや新聞だけでは知ることの出来ない大切なことが分かり、貴重な時間となりました。復興に向けて自分もできることはしていきたいです。頑張りましょう！（静岡）

今後親になる人たちが、何かあったときは自分の身を自分で守れるよう（先生の言う事をきかなくてもいいから裏の山に逃げなさい等と）言いきかせる等、学校であれ組織を 100% 信用しない、ある意味「意地悪さ」のようなものがあってもよいかなと思った。（滋賀）

若い方のお話を伺えたこと、希望が感じられました。（宮城）

津波による被害は水だけではなく、水が運んでくる家屋や車などによるものであること、津波は海がある方からだけではなくいろいろな方向からやってくること、津波は何度もやってくることを知りました。今までは津波というものの恐怖を教えられる機会がそれほどありませんでしたし、津波という多くの人の命を奪ったものから目を背けようとしてきました。震災に対する知識が足りないなと痛感し、まだまだ知らないことが多いのだというショックを感じました。当事者意識をもって、もっと多くの知識を蓄えることが、危機に対する想定の視野拡大につながるのではないでしょうか。
現在、大川小学校は「あの大川小」と呼ばれ、多くの人が手を合わせたり、ボランティアが花を植えたり掃除したりする場所となっています。しかし、あの日までそこは学校でした。多くの命がキラキラと輝き懸命に生きていました。そして、そこにはそんな命を守るべくして存在する大人がいました。
あの日の実態を知れば知るほど、なぜ子どもたちを守れなかったのかと大人達を責めたくなる感情が沸いてきます。しかし、絶対に忘れてはいけないのは、そこにいた大人たち全員が子どもたちを守りたかったということです。それぞれが子どもたちを守りたかったのに、組織として機能しなかったのはなぜか。あらかじめ意思決定のプロセスを決めておくこと、あらゆる危機を想定した訓練の重要性、そして、時間・情報・手段があるだけでは命は守れない、判断力と行動力をもって命は助かるということを学びました。（福島）

私が通った中学校の玄関付近にも「世界全体が幸福にならないうちは、個人の幸福はありえない」という宮沢賢治の言葉が飾られており、毎日のように目にしていた言葉だった。そんな日常がここにもあったのだと思うと、大川小学校の出来事を他人事には思えなかった。語り部の方が「今では悲惨でかわいそうな場所と言われるけれど、ここには普通の日常があったことを忘れないでほしい」と話されていたが、壁画と私の学校生活の一場面が重なった気がして、それを強く胸に刻めたように感じる。（岩手）

学校のすぐそばにある山に実際登ってみて、なぜ山に登るという判断をしなかったのだろうと、最初は考えてしまった。「子どもを助けたくない先生なんていない」という話を聞いて、メディア等の一つの視点から得た情報を鵜呑みにしていた自分が情けないと思った。子どもたちを助けたいという気持ちが、山に避難するという判断にならなかったというのが問題であったと知り、学校で行っている避難訓練はやはり想像以上の大きな災害が発生したことを想定して行うことがとても重要であると感じた。
「首都直下地震や南海トラフ地震は起こる。それは変えられないけど、それによって多くの命が亡くなる未来は変えられる」という言葉が印象的だった。（山形）

横に大きく倒れた渡り廊下には、とても衝撃を受けました。ふだん私たちが暮らしている中では考えられない話ばかりで、本当に勉強になりました。壁画に残っている「未来を拓（ひら）く」という言葉は、「過去から学んだことを、未来へ活かしてほしい」という力強いメッセージのように思いました。
私は、人の痛みや苦しみ、優しさが分かる人になりたいと、この東北訪問を通して感じました。実際に被災地に行き、肌で感じたことを多くの人の心に届くよう、自分から伝えていきたいです。（兵庫）

救えた命である大川小の子ども達の、元気で明るかった姿を決して忘れてはいけないと感じた。（長野）

あの日ここで何が起きていたのかを８年経った今、初めて知りました。話を聞いていて命を救うためには、時間・情報・手段よりも、そのための判断力・決断力の方が必要だということがよく分かりました。
私は将来教師になりたいと思っていて、災害が起こったとき子どもたちがいたら「念のため」を意識して小さな命を救えるようにしたいと思いました。（神奈川）

すぐに避難させなかった先生方だけに問題があったのではないということが分かった。震災時の対応についてのマニュアルに問題があったのだ。きちんとマニュアルがあれば判断も迷わずにすぐに子どもたちを避難させることができたはずである。
災害は結果論になってしまうのだと思った。結果が良ければマニュアル通りでなくても賞賛されるが、悪ければ叩かれる。よって、これから必要なことは、念には念を入れて避難場所や避難経路を熟慮することだ。子どもたちは先生の言うことを聞くように指導されているため、最後の頼りになるのは先生方である。
そもそも学校は子どもたちに生きる力を教える場所である。災害が起きたときこそ、それを教える格好の場であると思うのだ。災害時の対応について、他の場所でも再検討すべきなのと、先生方も臨機応変な対応が出来るように準備しておく必要がある。その時々の最良な判断をよく考え、ときには子どもたちの意見に耳を傾ける必要がある。（宮城）

バスから降りて最初に大川小学校を見たとき、心臓をぎゅっとつかまれたような気がした。
「目を凝らせば子どもたちの姿が見えてくる」「耳をすませば子どもたちの声が聞こえてくる」
その通りだと思った。なぜこの場所で多くの子どもたちの尊い命が犠牲にならなければいけなかったのか。あの時何が起こっていたのか。これから大人になる身として絶対に目をそらしてはいけないことだと思った。学生のうちに大川小に行くことができて本当に良かった。行ったことのない人にはぜひ行ってもらいたい。（福岡）

子どもたちが生きていたこと、そこには笑顔があふれていたこと、私は絶対に忘れてはいけないと思いました。「もしも」のために余裕をもって行動すること「いつも」を当たり前と考えてはいけないことを学ぶことができました。後悔しないように日々を生きていきたいと思いました。（神奈川）

「大川小学校」といったら震災の際に悲劇が起こった場所でかわいそうだと思ってしまっていました。しかし、実際にその場所に立ってお話を聞いて「かわいそう」という言葉だけで済ませたらいけないと痛感しました。東日本大震災ですでに起こってしまったことを悔やむだけではなく、これから、もしあのような災害が起きたときに、自分たちの命をどう守っていくかを考えようと思いました。そして、現在は震災遺構になっている大川小学校は、あの日までは私たちと同じくらいの年齢の子どもたちが楽しく過ごしていたところだということも忘れないようにしたいと思います。校歌にもあるように、大川小学校はこれからの人間の未来を拓く大切な場所であると心に刻まれました。（福岡）

いろんな人の協力があって残された大川小学校であった出来事を、私たちが伝えていかなければならないし、辛い思いをしながらも語り継ぐ活動を行っている人たちがいることも伝えていこうと思いました。（福岡）

一人の正しい判断よりも、組織の間違った判断の方が影響力があり、それが全体の判断になってしまうものだと感じました。そのため組織がしっかり正しく機能することの大切さがとてもよく分かりました。
私も組織の一部となり動く立場になるので、組織内で任された役割をしっかりと果たし、組織が正しく機能することに貢献したいと思いました。（宮城）

建物は本当に津波が来た瞬間で止まっているようで、子供たちが生活している風景を想像することができるくらいでした。
みんな被災した学校として大川小学校を捉えていると思いますが、他の学校と変わらずに日常生活があったことを私たちは忘れていたのだなと思いました。そして、その学校を「母校だ」と誇りを持って言っている人もいることを忘れていました。
建物を見て、とても痛々しさが伝わってきて、かわいそうだなと思うこともありました。しかし、ネガティブな気持ちだけで終わらせてはいけないと思いました。校歌にあるように、大川小は「未来を拓く」象徴であると捉えて、防災訓練を行ったり、組織の在り方を確認したりと、前に向かっていかなければならないと思いました。（宮城）

津波の大きさがわかる被災地は他にもありますが、この場ではそれと同時に「判断により多くの命が犠牲になった」ということも訪れた人に理解してもらうことが、遺された意味だと思います。（岩手）

小学生の子ども二人も参加し、貴重な話を聞かせていただきました。ありがとうございました。
阪神淡路大震災で被災したときはわたしは高校生でした。いま、母となり小学校の教師として働いています。大切な命を守るために何ができるか、どこにいても離れていても考えていきたいと思います。（兵庫）

ひなんくんれんしていても、本番にやらなきゃということがあらためてわかりました。そして、ひなん場所、ひなんけいろがよくても「行動」が大切なんだと思いました。「防災は地球となかよくすること」が心にのこりました。（愛知）

２度目の勉強会の参加でした。いつも詳細な解説と明快な語り口で、問題がわかりやすく理解できます。今後も参加可能な限り、関心をもってまいります。
（福島）

いちばんすごいと思ったのは、大川小学校をのこすと決めたことです。現地の人たちは悩んだと思いますが、のこすと決めたことがすごいと思います。ぼくもこれからがんばりたいです。（栃木）

「救えた命」という言葉が胸に突き刺さりました。大川小学校の校歌の題名は「未来を拓（ひら）く」です。子どもたちの未来を拓くために、私たち教育者が「判断力」「決断力」「防災の徹底」に取り組むことを改めて強く決意しました。（大阪）

語り部の皆さんは、悲しくつらい過去を封じ込めるのではなく、未来を拓くため、同じことを繰り返すことのないように、経験したことのない私たちにたいせつなことを伝えてくれているんだと感じることができました。（東京）

生きたかった今日、生きたくても生きられなかった今日。私は今日、その日を過ごしている。それは当たり前ではないということ。いつ何が起こるか分からないからこそ、その前の準備、実際起きてしまった時の判断・行動がどれほど大切か、今回改めて知ることができました。（宮城）

僕は当たり前の一日が、当たり前ではないことに気づきました。明日が今日より少しでもいい日になるように思いながら頑張っていきます。（熊本）

何もない場所にポツンと残る校舎。「ここは、大川の街の中心部だったんです。今は何もないけれど、ここにも、あそこにも、全て家があったんです。」人々の日常、子供達の未来が奪われるまで。
「一番恐ろしいのは津波ではない。逃げなかったこと」校庭のすぐ裏の裏山。そう聞くと、とても急なそびえ立つ山に感じられる。いざ、登ってみると、実際に校庭の端から津波が到達したという裏山の地点まで歩いても数十メートル。走れば数秒。なだらかな道だ。なぜ逃げなかったのか。なぜだろう。心からそう思った。事実を語り継ぐこと。その語りから感じたこと、学んだことを自らの生活につなげること。救えたはずの命、救いたかった命。小さな子どもたちが命をかけて、私たちに教えてくれている。絶対に繰り返したくない。明日は我が身。強くそう思った。（福島）

テレビでいつも見てたけど、実際に行って、当時の１～６年生、先生がここで命を落としたと改めて知ると遺族の皆さんが訴えている理由が少しわかった気がしました。
「もし、その場にとどまらず、高台に避難すれば助かったかもしれない」「もし生きていたら、そのうち私たちと会ってたかもしれない」といろいろな感情が出てきて、今回のバスツアーは「行ってよかったな」って思いました。その人たちの分まで生きていこうという自信がつき、本当に行ってよかったです。（宮城）

「あの時、子どもたちを救えた可能性が一番高かったのは教員だ」という言葉は、教師を志している私にとって、とても印象に残りました。
私たちが生きている今は、あの日亡くなった方々が生きたかった未来だということを忘れず、私なりに震災を語り継ぎ、今回学んだことをもっと深めるためにも、再度被災地を訪れるつもりでいます。（長野）

現実を受け止め、今後どのようにしていくかなど前向きに頑張っている、その姿に私はすごく感動しました。亡くなった人のためにも今を大切に生きようと、今までにないくらい強く思えました。貴重なお話、本当にありがとうございました。（宮城）

あの日まで普通の暮らしがあったという当たり前のことに気付けていませんでした。しかし、現地の方々はその土地や人が本当に好きなのだと、お話を伺ってその当り前を再認識し、素直にその土地や人々が素敵だということを伝えていきたいと感じました。（東京）

お話を聞いて「想像する」ことの必要性を感じました。私たちは「知っている」ことが防災だと誤解し、防災に必要な「考える」ということができていないのだと思います。
涙が溢れる中、自分には想像できないと考えていた私は「想像できない」のではなく、「想像していなかった」のです。（東京）

「分からないを分かり合う」という言葉がとても素敵だと思いました。考えや意見に本当は優劣はないし、分からないことがあってもいいのですが、なぜか今の世の中は二項対立や優劣をつけたがり、分からないことはよくないという風潮がある気がします。ハッキリとした答えが出ないとしても、考え続けることが大切なのかなと思いました。（愛知）

震災についてはもちろん、生き方についても深く考えることができました。（山口）

被災された方の想いや希望を知り、目の前の子どもたちに返していきたい。
「もしも」のときにパニックになってしまうことを防ぐのではなく、パニックになってから考えることを防ぐ必要があると知りました。そのため、平時である今、私達教師が大切な生徒を守るために行動し、恐怖に目を向ける必要があると強く感じました。大川小学校の先生方が抱いた無念を無駄にせず、多くの想いを将来へつなげていきます。（三重）

大切なことはいつも大切。「おはよう」や「ただいま」という言葉って本当に大切だと思う。（和歌山）

私は、当時小学１年生でした。私と同い年の子が、たくさんいたと思います。自分と置き換え考えてみたら、たくさん泣いて身動きが取れていないと思います。当時は、大人に頼ることしかできなかったけど今は、高校３年生になりました。大人ほど知識や力は、ありません。しかし、自然災害のために準備をすることはできると思いました。この先一人一人が、防災について学び、理解することで、たくさんの命が救われるのではないかと思いました。（神奈川）

僕は防災に対して「いつかくる不安」などという「恐れ」のイメージを持っていましたが，防災は「恐怖」ではなく助かるという「希望」だということ、防災をしなければ恐怖は恐怖のままだということが心に残りました。（宮城）

説明を伺い、ここで起きたことがとてもよく理解できました。裏山に実際に登ってみると、何故ここに逃げなかったのか？の疑問がますます強くなりました。
伝承館の展示には「なぜ？」に対するものが決定的に欠けていると思いました。伝承する意味はそこにあると思います。（東京）

将来先生になりたいという思いがさらに強くなりました。「ここには子どもたちの日常があった。誰も死にたくなんてなかった」というお話をいただき、子どもたちを救いたいと思いました。（兵庫）

僕は今まで震災の被害を受けた建物を遺すことは重要だと思っていましたが、その後の管理のことまでは考えていませんでした。後世により詳細に伝えるためには必要なことです。そして、それをするのは私達です。（栃木）

コロナで普段の生活がなくなったとしても、楽しい旅行がなくなったとしても、私は大切な人が生きているのなら何も言うことはないと思った。過去はもうやり直せないけれど、未来は今の自分が決めることができる。だから、何をするべきか、後悔のない楽しい未来を得るために行動したいと思う。（三重）

全国からいただいたメッセージは「小さな命の意味を考える会」ウェブサイトにも掲載し、随時更新しています。
311chiisanainochi.org/?page_id=84

未来の人にとって
ここが意味ある場所であってほしい。

2016年3月、石巻市は大川小学校の旧校舎全体を震災遺構として保存することと決定しました。

旧大川小学校校舎保存についての経緯

2012年 5月	石巻市が震災遺構保存について庁内調査を実施
2012年 5月～6月	市報・ホームページ上で「被災建築物等の保存について」の意見を募集
2012年 7月5日	市内外より寄せられた意見を取りまとめ。44件中38件が「大川小学校を保存すべき」と回答
2014年 1月	石巻市震災伝承検討委員会（2013年11月～ 2014年12月）で、震災伝承に関する市民アンケート実施 石巻市は「震災遺構保存候補対象物」として８箇所を提示するが、大川小は対象外とされた
2014年～	震災当時小5 ～中2の大川小卒業生が「チーム大川」を結成。母校保存の意見発信
2015年 3月	大川地区復興協議会の話し合いで「全て保存」が多数
2016年 2月	石巻市が震災遺構についての公聴会を開催
2016年 3月	石巻市が旧大川小学校校舎を震災遺構として保存決定
2019年 1月	石巻市が震災遺構として保存するための基本計画を発表
2021年 7月18日	石巻市の震災遺構として大川震災伝承館（管理棟）とともに公開。
2023年 2月 6日	石巻市の新年度予算に大川小学校劣化対策費計上

石巻市の震災遺構として整備されました

「被災建築物等の保存について」に寄せられた意見より

意見のあった 保存すべき施設等 （2012年7月5日／市民等からの意見 計44件のうち）

①大川小学校（又はその一部）.....38件

主な意見

- ●子ども（兄弟等）を亡くした。悲劇を繰り返さないためにも残してほしい。
- ●死亡・行方不明者が楽しく学校生活を送った学び舎であったという記憶の教訓とともに残してほしい。
- ●つらい思い出、しかし子どもたちが生きたかけがえのない場所。語り継ぐべき。
- ●悲劇の真相を解明するまで残すべき。
- ●壊すことは震災を忘れることになる。記憶を風化させてはいけない。
- ●子どもたちの最後の場所。何も残さないのは、何もかもなくなってしまう。
- ●他県に住む大川小のOB。後世に伝えるためにも残すべき。

②門脇小学校 1件
③ハリストス正教会 1件
④観慶丸商店と旧東北貯蓄銀行 1件
⑤田代島の古民家 1件
⑥その他 1件
⑦反対意見 1件

【意見応募者の居住地】

- ●石巻市内..... 14人
- ●県内の他市町 5人
- ●県外.....22人
- ●居住地記載なし 3人

石巻市「被災建築物の保存について」2012年

小さな命の意味を考える会
石巻市震災遺構に関する公聴会
311chiisanainochi.org/?p=1441

小さな命の意味を考える会
伝承・遺構について
311chiisanainochi.org/?cat=15

これから、何をどう伝えていくか、大川伝承の会では次のようなスタンスで伝承を考えています。

1　検討するにあたって

東日本大震災は、広い範囲を津波が襲いましたが、あれだけの規模でその痕跡をとどめている場所はもう大川小以外にないと言っていいでしょう。

①向き合いにくさ

石巻市
遺構 大川小は検討外
有識者委 27日初会合 事故検証委を優先

2013年11月9日　河北新報

震災遺構の保存、伝承については、地域ごとの様々な状況を踏まえた十分な検討が必要だと考えます。とりわけ大川小学校については、いろいろな事情が絡んでなかなか向き合いにくい状況にあり、当初は市の遺構検討委員会でも検討の対象から外されてきました。この「向き合いにくさ」の中にこそ伝承の本質があります。

学校管理下で過去最大の犠牲者を出してしまった事実はけっして忘れてはいけないと同時に、最もなかったことにしたい事実でもあります。あれが夢だとしたらどんなにいいでしょう。誰もが思っています。

そうした中で、中高生が勇気をもって意見を発表したことは特筆されます。

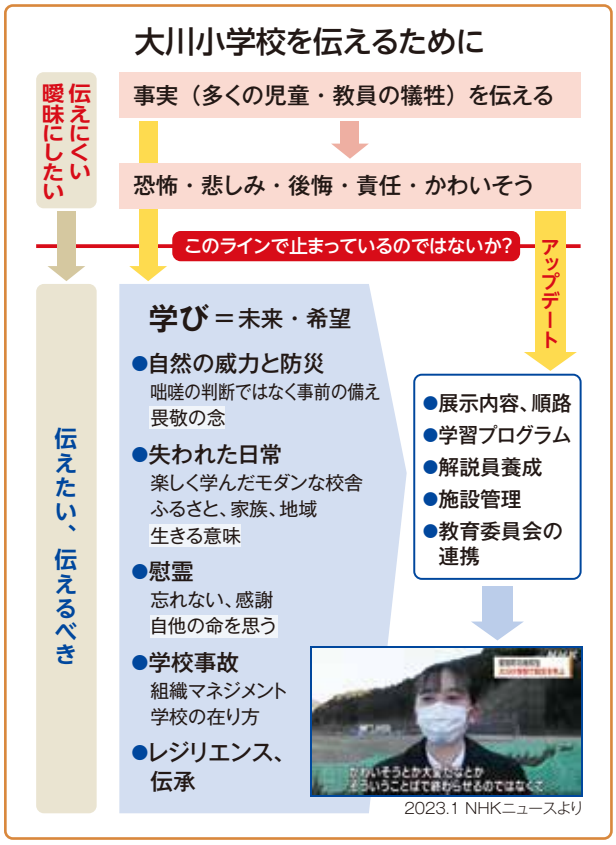
あの日までの、きれいな校舎、子どもたちの笑顔や歌声を覚えていてほしいです。あの日まで、楽しく学び遊んでいた命が、確かにあったのです。

そして、そんな学校の管理下で多くの子どもの命が失われてしまったということ。守るべき、守ってほしかった、守れたはずの命です。どんなに寒かったか、どんなに怖かったか、どんなに生きていたかったか…。そんな命があったことを、一緒に黒い波に飲まれた先生方の無念さとともに、忘れることなく、しっかり語り継いでいかなければなりません。

②伝承の方向性

震災遺構大川小学校の最大の特徴は、多くの児童・教員の犠牲という前例のない事実です。報道等でセンセーショナルな面が切り取られて、大川小のイメージになります。悲しみ、恐怖・後悔・責任…、だから「伝えにくい」「曖昧にしたい」になり、これまで議論が十分尽くされませんでした。

「悲しい」「かわいそう」のその先に、よりよい未来につながる意味を生み出せれば「伝えるべき」「伝えたい」内容に更新されていくはずです。そうした「意味づけ」をしていく経緯も伝えていきたいと考えています。



また、外部から多くの人が訪れることで、学校に足を向けにくいという声も多く聞かれます。訪れる方々にきちんと説明をし、どういう場所なのかをしっかり認識をもってもらうのが最も重要ではないでしょうか。メディアの役割も大切です。

遺族の想いは十分配慮すべきですが、大川小校舎は遺族だけのものではないし、むしろ遠くの人、未来の人にとっての意義を考えるべきだと思います。今回保存することとなったのは、みんなでそのことを考えましょうということなのです。壊してしまったら議論できないし、保存・解体は未来の人が決めてもいいのですから。内外の若い世代の声を反映させる体制づくりも必要でしょう。

私たちがガイドするときは、3.11の様子も説明しますが、震災前の校舎や風景、子どもたちの様子もイメージしてもらうようにしています。子どもと先生が、地域の方々に見守られて、笑顔で通っていたことが実感できれば、なぜこうなったんだろう、自分はこれからどうしていけばいいだろうと考えてくれると思うのです。訪れた一人一人にとって意味をもつことが大事です。

石巻市では令和５年度予算に遺構の整備費が計上されることとなりました。市長はじめ関係の皆様のご尽力に感謝申し上げます。

2　何を伝えるか

石巻市は保存決定の３年後、2019年１月に整備基本計画を発表しましたが、「学校防災」に関する記述がない等、「何をどう伝えるか」の議論がまだまだ十分ではありません。仙台市荒浜小学校や気仙沼市向洋高校等の事例も参考にしつつ、計画を進める必要があります。

未来の人は、校舎を見て「昔の人はなぜここを遺したのだろう」と思うはずです。私たちの言葉、行動はそこに届けるものです。

次の４点をバランスよく伝えなければなりません。

①あの日までのこと

ここはあの日まで、楽しく学び遊んでいた学校だということ。地域の人に見守られて過ごしたたくさんの思い出。あの日までの風景、町、命。

②あの日のこと

14時46分の強く長い揺れの後、15時37分に巨大な津波が襲うまでの事実。

時間、情報、手段、救える条件があったにもかかわらず、動けなかったこと。

何があったのか事実に基づいた考察。

海から４km近く離れている場所を襲った巨大津波の様子とメカニズム。

③あの日からのこと

地域から多くの子どもたちの姿が消えたこと。悲しみ、喪失感。

無駄にしてはいけないという取り組みとその難しさ。

保存決定に至るまでの経緯（簡単に保存を決めたわけではないこと、卒業生をはじめ様々な意見があったこと、なかなか議論を進められなかった事情）。

清掃、花植えなど、多くの人が大切にする場所になったこと。

④これからのこと

この場所をどう遺し、伝えていくかを対話を通して考える。

一人一人がこれからの進む方向性を考える。

失われた命に想いを馳せ、祈り、誓う。

語り部ガイド レポート

2016.12.12　始まりの場所でありますように

2016年12月10日、大川伝承の会主催の第１回語り部ガイドが、旧大川小校舎で行われました。小雪がちらつき、まるであの日のような空模様でしたが、県内外からたくさんの方々においでいただきました。

震災前の学校の様子や当日の状況等全体の説明の後、シイタケ栽培の体験学習が行われていた裏山と、実際移動したルートを歩きながら案内をしました。

ここは多くの命が波に飲まれていった場所です。たくさんの悲しみ、後悔、恐怖が渦巻く場所です。でも、できれば多くの皆さんに向き合ってほしい場所です。

子どもたちと先生方が、楽しく学び遊んでいた場所として。一人一人が、未来に向けて何かを気づく場所として。思い出と、願いと、祈りの詰まった場所として。

どうか、この場所が終わりではなく、始まりの場所でありますように。

語り部ガイド レポート

2017.01.27　輝きも伝えたい

大川小の校庭で伝えたいことは、事故は二度と繰り返さないということ、そして、素敵な町と学校がここにあったことです。この二つは切り離せません。

たしかにここは津波が襲った場所なのですが、ここは、あの子たちが大好きな大川、大好きな大川小学校です。教室で、体育館で、校庭で、走り回る子どもたちの姿や、歓声をイメージしてください。耳を澄ませて、目を凝らしてください。

失われた輝きを伝えるのは、時間が経つほどに難しくなります。でも、とても大切なことでもあると思います。慰霊も検証も防災もそこが始まりです。伝え続けることで、思い出も笑顔も歌声も命も輝き続けると思います。

語り部ガイド レポート

2018.09.18　7年半…復興と風化

９月17日、大川伝承の会第17回語り部ガイドが行われました。秋空の下、県内外から100名以上の方に参加いただきました。前日のツール・ド・東北でもたくさんの皆さんが訪れました。

あの日から7年半。「復興」と「風化」という言葉をあちこちで見聞きします。どちらも「進む」という言葉を伴って。

二つは相反するものなのでしょうか？ 復興が進むことは、風化が進むことなのでしょうか？

大川小の校舎は、2016年３月に石巻市の震災遺構としての保存が決まりましたが、何を伝えるか、どう遺すかの議論は深まっていません。ソフト面の議論がないままに、ハード面を作ることはできないでしょう。

でも、急ぐ必要はまったくありません。

大川小の校舎は、教室の隅々まで清掃が行き届いています。花が植えられ、草がきれいに刈られ、誰もゴミを落としていきません。

交通の便はよくありませんが、連日多くの方が訪れて、想いを深めます。若者も伝承に取り組んでいます。

ここは笑顔で学び遊んだ学び舎であること。あの日何が起きて、今日までの日々がどうだったのか。校舎が語りかけています。

風化しないことが、復興の大事な要素なのだとすれば、目指すべき未来を考えることが、復興なのであれば、ここは「復興の最前線」と言えるのかもしれません。

語り部ガイド レポート

2021.7.6 集い学ぶ大切な場所であり続けますように

大川小学校は、昨年から震災遺構として周辺及び管理棟の整備が進められてきましたが、工事が完了し、7月18日から一般公開が始まります。かつて町があって、そしてガレキに埋もれた場所はきれいな芝生になりました。

すっかり変わってしまったと残念がる声がある一方で、きれいになったのでようやく来られたという人もいます。

この場所で何をどう伝えるかはそう簡単なことではありません。

案内板や伝承館（管理棟）に解説はありますが、すべて書いてあるわけではありません。どれだけ大きなスペースを作っても同じかもしれません。ここで起きたことをしっかり受けとめ、解説できる人はまだ誰もいないでしょう。

今までもいろいろなコメントや報道がありましたが、必ず賛否両方の意見が出ます。意図しない形で伝わってしまうこともありました。どのメディアも有識者も「難しい」と言います。今回の伝承館の展示内容もそうです。

前例のない大きな悲しみにどう向き合えばいいのか誰もが戸惑います。あるいは批判を恐れ腰が引けてしまい、大切だと分かっていながら、つい後回し、他人任せになります。検証委員会も途中で投げ出しました。

今回の震災遺構の整備にあたっても、いわゆるソフト面の検討が、なかなか始まりませんでした。伝承の意義や内容を詰めないまま工事をしていたのです。本来は逆であるべきです。

大川小のことに限らず、私たちの周りにはそういう事例が少なくありません。「難しいからやらない」と避けるのではなく「大切なことは難しくてもやる」のです。

今までできなかったのであれば、これからやればいいのです。批判も含め、いろいろな意見が出るのはむしろ自然なことです。アップデートしていけばいいのです。18日はその始まりです。

また、今回の工事は周辺と管理棟の整備です。校舎は手つかずのままです。ありのままを遺すためにも、補強やメンテナンスが必要な状況です。肝心の校舎が朽ち果ててはいけません。

市は会見等で、その対応についても明言していますので、やがて動きがあると思います。こちらも注視していきます。

「一般公開」と改めて言うまでもなく、あの日から連日多くの方がここに足を運び、想いを寄せています。これからも集い、学ぶ場所であり続けますように。

大川小の隣接地にオープンした大川震災伝承館

痛んできている野外ステージの壁画。左：2014年12月　右：2021年8月

2017年に大川伝承の会で設置した7基の手作りの案内板は、約4年間の役目を終え、撤去することになりました。

語り部ガイド レポート

2022.6.6 「伝承」を動かす

震災から11年、2016年3月に石巻市が校舎の保存を決めてから６年経ちました。昨年７月の震災遺構公開から間もなく１年になります。たくさんの方が現地を訪れています。

学校の教育旅行や教員研修、社員研修等の団体も多く、大川伝承の会でも連日ガイドをしていますが、案内できているのはごく一部の方のみです。

「何を伝え、どう遺すか」、この１年、いや11年間ずっと問われ続けていますが、震災遺構として公開されている現在に至っても、十分検討されているとは言えません。ガイドの話がなくても、理解を深められる取組みが求められています。

「行ってきます」の背中に乗っていたランドセル。
学校の屋根で見つかりました。

多目的スペースではいろいろな企画や展示が増えています。

大川伝承の会では、語り部ガイドの他、リーフレットや冊子資料を作成してきましたが、新たに次の２点について取り組んでいます。

①管理棟（伝承館）の一角に資料閲覧スペースを設けました。
テーブルと展示パネルを設置し、皆さんから寄せられたメッセージやＱ＆Ａ等を紹介しています。小さいスペースですが、資料は少しずつ増やしています。

②スマホ・ＰＣで見られる震災遺構の案内ページを作りました。
小さな命の意味を考える会のホームページ内に、校舎・校庭及び周辺地域を説明するページを作りました。スマホ・ＰＣでご覧いただけます。ぜひご活用ください。

震災遺構大川小学校ガイド　こちらからご覧になれます。

語り部ガイド レポート

2022.8.11 ここから拓く未来が消えないように

大川小学校の校庭の野外ステージの壁画に「未来を拓く」と書いてあります。

校歌のタイトルです。

劣化が進み、心配する多くの声が寄せられていました。この度石巻のサン商事・留畑塗装さんが無償での作業を申し出てくださいました。

8月9日朝、無事、劣化を防ぐための塗装が行われました。

各方面のご縁、ご協力に感謝。「ありがとうございます」の声が聞こえてきます。

大川小の事故について、立場を超えて一緒に考える場を持ちたいと思いました。

小さな命の意味を考える会では、大川小で起きたことに関し、テーマを決めて考察をする「勉強会」と、自由にいろいろなことを語り合う「座談会」を2017年5月から続けています。

誰にとっても大切なこととして

毎回、一般の方、メディア関係者、教育関係者、ＮＰＯ関係者…、様々な立場の方々が県内外から参加します。

多くの方々が大切なこととして関心を寄せてくださっていること、そして、何年過ぎてもまだ整理できていないことがたくさんあるのが分かります。

大川小の事故は、東日本大震災の津波による被害であると同時に、学校管理下で起きたという面が大きな特徴です。学校で子どもと教師がこれだけ犠牲になった例は今までありません。校庭にいた子どもの９割以上です。東日本大震災で、学校管理下で、避難をほとんどせずに犠牲を出したのは大川小だけです。

突然、地域から子どもの姿が消えました。助かった子どもたちもいますが、あの日から急に同級生や先輩、後輩がいなくなったのです。遺族はもちろん、社会全体がまだ受け止め切れていません。戸惑い、迷っています。当局であるはずの教育委員会は、まともに向き合うことなく曖昧な説明を続け、次々に担当者が代わりました。第三者検証委員会は、時間と予算を浪費した末、事実の解明を放棄し、形式的な提言を示しただけです。「いつまで騒いでいるんだ」という声もありますが、終わらせてはいけないのです。

立場によって見方も変わってくる部分もあるでしょう。相手を気遣うあまり、言いにくいこともあるでしょう。それだけに、いろいろな立場を超えて一緒に考えようという形が、これまでできそうでなかなかできませんでした。この勉強会は、2013年秋に「小さな命の意味を考える会」を立ち上げてからずっと模索してきた形です。こういう場が持てたことは、感慨深いものがあります。

二転三転する当局の説明、対話の難しさ、そして、突然、我が子を亡くした遺族の想い…。

あの日からの出来事は、けっしてきれい事だけでは語れません。感情のコントロールができずバランスを欠くこともありましたし、意図しない形で相手に伝わることも、今まで多くありました。メディアの皆さんも「何をどう伝えたらいいのか」悩んでこられたことと思います。

きれい事ではない事実、想いを出し合える場にしたいと考えています。そこから方向性も見えてくるはずです。実際、これまでの勉強会では、テレビや新聞では触れないような話がたくさん出ました。世の中にそのままストレートに伝えたら、インパクトはあるかもしれませんが、誤解も受けるでしょう。「勉強」すべきはその先です。

座談会レポート　2018. 05. 28　子どもたちにも伝えたい

4月26日、仙台高裁で控訴審判決が出ました。その後はじめての語り部ガイドと座談会を行いました。

5月27日、第14回大川伝承の会語り部ガイドが行われました。

小学校の運動会シーズンです。校庭を走り回る子どもたちを思い浮かべていただけたでしょうか。青空の下で。

午後は河北総合センターに会場を移し、小さな命の意味を考える会の座談会。40名の方が参加し、特にテーマを限定せずに自由に意見・質問を出し合いました。

やはり、4月に判決が出た控訴審について、多くの意見が出されました。判決については、内容はもちろんですが、一人一人がどう受け止めるか、そして、どう伝えていくか、つないでいくかが大事だという声が多くありました。判決は一つの過程であり、むしろようやくスタートラインに立ったのだということです。裁判は「金」「対立」「責任」という言葉が一人歩きしがちですが、340ページ以上にわたる判決文は、むしろ教員側に立った視点で書かれています。

「340ページ」という数字は、今回の判決の重要さを伝える一方で、じっくり読み込むにはやや抵抗を感じてしまうのも確かです。ですから、まず趣旨を分かりやすく伝える言葉、手法も必要でしょう。私たちも自分たちの課題として取り組みたいと考えています。やっぱり、子どもたちにもしっかり伝えていきたいのです。

勉強会レポート　2018. 07. 16　何を、どう伝えるか

7月1日午前中に行われた大川伝承の会語り部ガイドには、県内外から200名以上が参加しました。

午後からは小さな命の意味を考える会の第5回勉強会を行いました。テーマは「何を、どう伝えるか」。

会場はオープンしたばかりの石巻市防災センター。最新の設備を備えた防災拠点施設です。廊下には**「被災地石巻市の記憶」**というタイトルで、東日本大震災の被害状況の写真パネルがたくさん展示されていました。

ところが、その中に**大川小学校の写真はありません**。確か大川小学校の校舎は、石巻市の震災遺構のはず。

今回の勉強会は、まさにこの部分に焦点を当てました。市の防災センターに展示がないことが、大川小学校を取り巻く状況を表しています。「防災センターに展示するべきだ」としても、どんな内容にすべきなのか、明確な指針を誰も示せずにいます。

７年４ヶ月を経た現実です。

多くの犠牲に向き合う。復興も防災もそこから始まるはずです。勉強会では「どんな言葉で、どんな手法で発信すべきか」様々な意見が出されました。まず、こうした議論の場を作ることが何よりも必要に思います。

今回、検討したことをもとに、少しずつ具体的な動きを進めていこうと考えています。

多くの皆さまと未来への思いを共有したい。会の方向性が、少しずつ形になり始めています。

控訴審判決の後、小さな命の意味を考える会と全国各地の様々な団体とのコラボによる、研究会やディスカッションを行う機会が増えています。その一部をレポートします。

シンポジウム「子供の命が守られる学校を作るために ～大川小高裁判決に学ぶ」

2018年12月2日(日)　会場：仙台弁護士会館
主催：大川小津波被害国賠訴訟原告団　協力：大川伝承の会・小さな命の意味を考える会

●経緯説明　●遺族からの言葉　●地裁・高裁判決の解説　●学者による分析　●パネルディスカッション

この判決を学校防災の礎とするために、原告団が主催した初めてのシンポジウム

原告団が主催する初めてのシンポジウムに、県内外からたくさんのご参加をいただきました。ご協力、ご参加いただいた方々に心より感謝申し上げます。

この判決を正しく理解してもらうため、そして、全国の子供たちの命を守る学校防災の礎とするために、弁護士、学者、学校関係者それぞれの立場からの見解と提言を、遺族の想いと合わせて伝えることができました。

裁判はややもすると結果だけがひとり歩きしてしまいがちですが、ほんとうに大切なのは、これからです。判決文343ページの一言一句にこめられたものを未来にどう生かしていくか、教育現場はもちろん多くの方々が向き合っていく必要を感じました。

会場には、子どもたちが身につけていたランドセルやヘルメットが置かれ、あの子たちが私たち大人をじっと見ていてくれるようでした。

あの出来事を、あの命を、ほんの少しでも未来の命の輝きにつなげていけたらと願っています。

裁判・判決はゴールではなく、スタートラインだと思います。ようやくここまできました。ここからです。みんなで向き合いたいです。

ボランティアサミット「未来をひらく ～3.11から～」

2019年２月16日㈯　　会場：埼玉県防災学習センター そなーえ
主催：埼玉県防災学習センター　共催：「未来をひらく」実行委員会・聖学院大学ボランティア活動支援センター

●佐藤敏郎×只野哲也講演会　●座談会　●グループワークショップ　●懇親会　●展示会

関東の大学生が、震災に学び「未来をひらく」ことを目指して企画したイベント

埼玉をはじめとした関東の大学生が、実行委員会を組織して企画したイベントです。「震災のことを知る」ということに留まらず「震災から学び、未来をひらく」ことを目指し、個々にボランティア活動をしていた大学生の皆さんが集結しました。

以前、大川小に来てくれた彼らに校庭で言った言葉が、今回の企画につながったそうです。

「野外ステージの壁画に書いてある言葉『未来を拓(ひら)く』は大川小の校歌のタイトル。大川小の子どもたちが壁画に遺したこの言葉は、津波も破壊しなかった。ここは悲しいことがあった場所だけど、未来につながる何かが生まれる場所でもあってほしい。帰って『大川小ってどんな場所だった？』って聞かれたら『あそこは未来をひらく場所です』と答えてほしい。」

何度も打合せを重ね、当日を迎えました。企画のタイトルは「未来をひらく」。ポスターに大川小の写真はないし、悲劇的なフレーズもありません。

どうしたら「未来をひらく」につながるのか

それは、悲しみや後悔から目を背けることではなく、むしろ起きてしまったことにしっかり向き合うことなのだと思います。そこから見えてくる復興、防災、伝承…。

たくさんの大学生、高校生が参加した中、大川小の卒業生・只野哲也くん（大学1年生）がグループの中に入ってディスカッションをしていました。

只野くんは、あの日助かった奇跡の少年、悲しみを乗り越え語り部を…みたいな扱われ方を８年近くされてきましたが、今回の埼玉ではそうではありませんでした。大人がなかなか超えられない垣根を、若者はポンと越える。いや、垣根ってそもそもなかったんですよね。

今回の企画はあくまでもきっかけだと思います。課題も少なからず見えてきたようです。

「これからの学校防災を考えるフォーラム」

2019年３月23日㈯　　会場：エル・パーク仙台
主催：学校防災を考えるフォーラム実行委員会

●遺族からの言葉　●大学生による発表　●パネルディスカッション

「これからの学校防災のあり方」を現場の実践から学び、ともに考え行動するために

このフォーラムは県議会議員の皆さまが党派を超えて実行員会を立ち上げ、主催してくださいました。遺族の想いも大切にしつつ、学生、専門家、そして学校現場の視点から意見が交わされました。

震災当時、釜石東中の副校長だった村上洋子さんが、「釜石の奇跡※1」がどうして可能だったのかを話してくださいました。紹介されたのは分厚いマニュアルではなく、「避難しました」のカード※2のようにシンプルで分かりやすい取り組みばかり。逃げるべくして逃げ、助かるべくして助かったのです。「奇跡」ではありません。

襲ってくる津波から散り散りになって逃げる釜石の子どもたちの写真が映し出されたとき、涙が出ました。ジャージの色が大川小とよく似ています。大川小の子たちは津波が襲ってくる川に向かいました。移動時間は１分間、散り散りではなく、狭い道を一列で…。

仕方がなかったなんて誰も思ってはいません。「子どもの命を守る」のは学校教育の大前提です。高裁判決では「根源的」という言葉が使われています。マニュアルが不要なわけではありません。地域との連携も必要です。ただし、それはいざというときの判断・行動につながるものでなければなりません。

今の学校で、子どもの命の輝きが見えなくなっているのであれば本末転倒です。すぐに見直すべきです。

このフォーラムがよりよい未来へ向かう何かのきっかけになればと思います。学校が、キラキラ輝く命の、走り、歌い、学ぶ場所でありますように…。

※1　東日本大震災の大津波で被害を受けた岩手県釜石市で、小・中学生のほぼ全員が無事に避難できたこと

※2　釜石で実践された、安否を玄関先に貼り出すカード

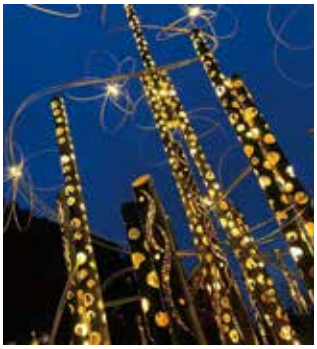
Team大川―未来を拓くネットワーク 設立

大川小学校の卒業生を中心に、若者たちが団体を立ち上げました。中高生時代に校舎保存を訴えたチーム大川が母体。子どものいのちを真ん中に、子どもたちの生きた証を次世代へ継承していくため活動しています。

2022年2月意見表明を行い、3つの基本理念が示されました。

【基本理念】

1. 未来のいのちを救う　2. 子どもの笑顔を守る　3. みんなと向き合い心を育む



大川竹あかり 2022

2022年3月11日、追悼と未来への想いを込めた84本の竹あかりが灯りました。地元だけではなく、全国の方が実行委員となって準備が進められ、６回行われた制作ワークショップにはのべ500名以上が参加しました。

当日は、この時期には珍しく風のない穏やかな天候となり、多くの方が訪れました。

実行委員会のHP　ookawatakeakari.jp

小さな命がつながる
リンク集

命について考え、守るために活動している皆さんとの輪が広がっています
この他の方々とのリンクも「小さな命の意味を考える会」WEBサイトでご紹介しています
311chiisanainochi.org/?page_id=769

Team大川 未来を拓くネットワーク
facebook.com/Teamokawa/

東日本大震災当時の大川小学校の子どもたち108人のいのちを真ん中に、子どもたちの生きた証を次世代へ継承していくため発足し、活動しています。

大川小学校からの未来
facebook.com/Ookawa2011/

あるべき未来を見据え、大川小学校で起きたことについて、様々な角度から詳細な検証を続けています。

閖上（ゆりあげ）の記憶
tsunami-memorial.org

慰霊碑を守る社務所として、地元閖上（宮城県名取市）の方たちが集える場所として、震災を未来へ伝える場所として、2012年4月22日にオープン。語り部の会、閖上案内ガイド、震災遺構の保存、震災学習などを行っています。

学校安全管理と再発防止を考える会
shinnosuke0720.net

事故調査、原因究明、責任の所在が不明のまま風化されてしまうことで、幼稚園、保育園、学校、教育現場で子供の尊い命が失われているという現状が、残念ながら後を絶ちません。子どもたちの命を守れるのは大人たちです。何ができるのか、何が必要なのか、再発防止に向けて事故と真摯に向き合い、未来へつなげていきたいと考えています。

一般社団法人 健太いのちの教室
kenta-inochiclass.com/

東日本大震災で犠牲となった田村健太や多くの尊い生命を慰霊するとともに、人の生命・身体の安全を第一に守る大切さを学び、企業・組織の防災・減災及び安全対策に生かすための情報発信・研修等を行っています。

日和幼稚園遺族有志の会 子どもの安全を考える
311hiyori.com/

東日本大震災で5人の園児が犠牲になった、石巻市の私立日和幼稚園の幼稚園バス事故からの教訓を、多くの方と共有するページです。

浜名湖カッターボート転覆事故を考える
always-kana.jimdo.com

2010年に起きた事故について、真相を追い求めた遺族と支援者の記録。学校の危機管理の問題点を子どもを預かるすべての関係者に認識していただき、二度と学校の危機管理の希薄さによって、子どものいのちが奪われないよう、常に再発防止に向かって努力を重ねることを訴えているサイトです。

全国学校事故･事件を語る会
katarukai.jimdo.com

「自分の子が、どうして？」「朝、『行ってきます』と元気よく出て行ったのに、なぜ？」わが子が学校で事件や事故に遭ったとき、どうしてこんなことが起きたのか知りたい、それが保護者の共通の思いです。このような状況に陥っている皆さんを支援したい、これが会員全員の願いです。この願いに共感する弁護士や研究者などの専門家も参加しています。よりよい方向に向かうための対策をともに考え、探っていきましょう。

NPO法人 ジェントルハートプロジェクト
npo-ghp.or.jp

いじめ問題の解決を目指して、いじめ自死遺族等が2003年３月に設立したNPO法人です。いじめのない社会の実現のため、全国各地での講演会、展示会、勉強会やコンサート等の取り組みを通して、多くの人たちに「やさしい心」を伝えるための活動を行っています。

一般社団法人 ここから未来
cocomirai.org

子どもの生命や人権を守るため、「いじめ」や「学校事故」「虐待」をはじめとするさまざまな問題の調査や研究を行います。学校事故･事件の被害者と近いため、そこで得た情報をもとに、事故・事件の再発防止に役立つ情報を収集・発信することで、子どもが安心して生きていける世の中をつくることを目指します。

Smart Supply Vision（スマートサプライビジョン）について

smart-supply.org

一般社団法人Smart Supply Vision（通称：スマートサプライビジョン、略称：SSV）は、一般社団法人Smart Survival Projectから独立してできた団体です。東日本大震災を経験したわたしたち一人ひとりが、「ささやかだけれど確かにできること」を積み重ね、「自分が社会をより良くできる」そう信じられる社会づくりに寄与することを目的として活動を行っています。主な事業は、「必要な人に必要な支援を必要な分だけ」を世界中から双方向で実現できるプラットフォーム「スマートサプライ」の提供、「311を伝え、未来を共に考える」講演及びワークショップなどの防災教育、備災に役立つ冊子等の発行・普及などで、新潟県から補助をいただき、自治体・企業等との協働プロジェクト『スマートサプライEC』も進めています。

主な活動

スマートサプライ

東日本大震災を経験したわたしたちの
ネット時代の新しい支え合いの形

スマートサプライとは、東日本大震災の際に3000か所以上の避難所・仮設住宅・個人避難宅エリアを世界中から継続的にサポートすることを可能とした、ふんばろう東日本支援プロジェクトの物資支援方法を雛形とした、市民参加型の支援プラットフォームです。

現地で必要な物資・サービスの聞き取りを行い、それをインターネット上のサイトに細かく掲載することで、遠方からでも、必要な人に必要な支援を必要な分だけ届けることができます。必要な物や相手が明らかなため、特定の物資等が過剰に集まることはなく、確実に役立っているという実感と手応えのある支援が可能となります。

また現在は、様々な自治体や企業様がスマートサプライを災害支援に活用できるよう、スマートサプライを使った避難訓練の実施や、企業におけるスマートサプライの構築に向けた取り組みを行っています。

スマートサプライ活用実績

令和4年福島県沖地震、ウクライナ、令和3年8月豪雨、令和2年7月豪雨、新型コロナウィルス、令和元年東日本台風、平成30年北海道胆振東部地震、平成30年7月豪雨、大阪北部地震、熊本地震、ネパール大震災等の際に、約235のプロジェクトで11万点の支援を実現。企業、自治体、NPO団体等とも連携し、物資支援のマッチングが行われました（2022年8月23日現在）。

スマートサプライは、2016年3月に「第2回グッド減災賞」の最優秀グッド減災賞受賞、2018年11月に「第2回社会課題の解決を支えるICTサービス大賞」の大賞を受賞いたしました。

スマートサプライで支援するには
■WEBサイト　smart-supply.org/projects

講演、ワークショップ

3.11を伝え、「あたらしい未来」を拓く
いのちを守る教育プログラム

スマートサプライビジョンでは、特別講師を全国の学校、地方自治体、企業等に派遣し、「自分と大切な人のいのちを守る」教育プログラムを、講演やワークショップ形式でお届けしています。

講演

「3.11を学びに変える」

講師：佐藤 敏郎（SSV理事／特別講師）

小さな命の意味を考える会代表、元中学校教員。未来に向けて、3.11をどのような学びに変えていくべきなのか、事例

をあげて考えます。
また、子供の時に被災した東北の若者たちとともに語り合う「あの日を語ろう、未来を語ろう」も各地で展開。2016年2月にはこの活動が『16歳の語り部』（ポプラ社）として書籍化され、「平成29年度 児童福祉文化賞 推薦作品」を受賞しました。

ワークショップ

「防災ママカフェ®」

講師：かもん まゆ（SSV特別講師）

熊本地震、東日本大震災を経験した乳幼児ママの声をまとめた、ママのための防災ブック「その時ママがすることは？」（「冊子提供」参照）や、映像、スライドを使い、被災地のママたちの具体的な体験と、子どものいのちを守るためのリアルな情報と対策を伝える備災講座です。乳幼児同伴ももちろんOK。「ママが知れば、備えれば、未来は変わる」を合言葉に、私たちができる「備え」をわかりやすくお伝えします。ママだけではなく、地域住民に向けた「防災まちカフェ」、小学校で実施する「防災子どもカフェ」の他、地方自治体等でも講演、フォーラムにも出演しております。NHKEテレ「すくすく子育て」でも紹介されました。

講師派遣に関するお問い合わせ・お申し込みは
■WEBサイト　smart-supply.org/speakers
■Eメール　info@smart-supply.org

オンライン講座

「学校防災アップデート大作戦！ ～子どもも、先生も命を守れる学校に～」

東日本大震災以降、学校は子どもたちの命、先生の命を守れる場所になったのでしょうか？
教職員を対象とした意識調査（2021年）では「災害に関する知識も経験もない自分が、子どものいのちを丸腰で預かる不安」や「硬直化した学校組織」「形骸化した防災マニュアルとおざなりな防災訓練」「変えなくちゃと思いつつ、何をどうしていいか分からない」「防災どころではない」等々、現場の状況がつづられていました。
Smart Supply Visionでは、学校関係者・教職員対象のオンライン講座を震災10年の2021年3月よりスタート。さらに、情報や事例をシェアし、交流しながら学びを深め合う参加者限定コミュニティも運営しています。2022年8月現在、9期を終了し、105校303人の先生が参加しており、メディアでも紹介されました。

講座詳細、開催日程等・お申し込みは

冊子・防災グッズの提供

「津波から命を守るために 大川小学校の教訓に学ぶQ＆A」

再びやってくる津波により同じ悲劇が起きないよう、大川小学校の研究をもとに作成した冊子です。これまで22万人以上の方々に無償で配布してまいりました（現在はご購入いただいています）。
〈200円/冊、5冊からご購入可能。税込・送料別〉

ママのための防災ブック
「その時ママがすることは？」

東北、熊本で被災した乳幼児ママたちのリアルな声を集めた冊子です。防災ママカフェ®でお伝えしている内容がわかりやすくコンパクトにまとまっており、備えのヒントがぎゅっと詰まっています。
〈200円/冊、5冊からご購入可能。税込・送料別〉

携帯用防災グッズ（3種類）
スマートシェル・ボトル・ポーチ

外出先での被災に備えるため、いつものバッグにプラスで入れられる防災グッズです。大きさや内容の違う3種類から、携帯する人の持ち物や生活に合わせてお選びください。
〈シェル 1,000円、ボトル 2,000円、ポーチ 3,000円。税別・送料別〉

ご購入のお申し込みは
■WEBサイト　smart-supply.org/store

ご支援、ご参加のお願い

スマートサプライビジョンは、311をきっかけに「必要な人に必要な支援を必要な分だけ」を実現することで、一人ひとりの思いが直接届く「自分が社会をより良くできる」そう信じられる社会に暮らしたいと思っています。

このビジョンに共感いただけるみなさまは、ぜひ私どもの活動にご参加、またご支援いただきたく、どうぞよろしくお願いいたします。みなさまからのご支援は、私たちの活動をより多くの方に知っていただき、持続可能な運営体制を築くために、大切に使わせていただきます。

■Smart Supply Visionコミュニティへのご参加、お問い合わせは
info@smart-supply.org

■ご寄附は　ゆうちょ銀行　九〇八店　普5636292
一般社団法人Smart Supply Vision
シャ）スマートサプライビジョン

小さな命の意味を考える会 について

311chiisanainochi.org（日本語） 311chiisanainochi.org/?page_id=3379（英語）

小さな命の意味を考える会は、大川小学校で起きたことについての検証、伝承、そして想いを多くの人と共有する目的で作られた任意団体です。2013年11月、ホームページを作成し、当時行われていた「大川小事故検証委員会」に公開質問状を提出したのが活動の始まりです。

国内外から寄せられる様々な情報やメッセージもふまえ、主にWEBサイト等による発信、勉強会や座談会の開催、他団体との交流等の活動を続けています。

主な活動

2013年11月30日	大川小事故検証委員会に公開質問状を提出。ホームページを開設し、活動を開始
2014年11月20日	石巻市議会議員対象に活動報告会　311chiisanainochi.org/?p=743
2015年3月14日	**第3回国連防災世界会議でパブリックフォーラム「小さな命の意味を考える」を開催** ●主催：NPO法人 KIDS NOW JAPAN　●会場：仙台市市民活動サポートセンター 冊子「小さな命の意味を考える」（第1集）発行（2019年5月現在 約7万冊配布）
2016年11月21日	宮城県議会議員現地視察対応　311chiisanainochi.org/?p=1764
2019年6月	冊子「小さな命の意味を考える　第2集 宮城県石巻市立大川小学校から未来へ」発行

※その他、大川小学校事故に関する勉強会・座談会を不定期に開催

第3回国連防災世界会議 一点の曇りもなく

311chiisanainochi.org/?p=1061

2015年３月14日、国連防災世界会議の一環としてパブリックフォーラム「小さな命の意味を考える」を開催しました。

来場者は「多くても100人程度」と考え準備をしていましたが、300人を超える方々に来場いただきました。
開始20分前に立ち見で会場が溢れました。
準備中、次々に入ってくる人達を見て「信じられない」という思いと同時に、もしかしたら、この中にまじって、子どもたちも来ているんじゃないかと不思議な気持ちになりました。

こんな感想をいただきました。
フォーラムでの報告は、一点の曇りもなく「大川小の悲劇」の本質を語ってくれました。

あの日の校庭に、あの命たちに、どれだけ「曇りなく」向き合えているかどうか。
ほんとうに守るべきものに「曇りなく」向き合えているかどうか。

たくさんの方においでいただき感謝しています。
これは始まりなのだと思います。

スマートサバイバープロジェクト 代表理事 西條剛央と、小さな命の意味を考える会代表 佐藤敏郎が考察を述べた後、東京大学地震研究所の纐纈一起先生、富山大学人間発達科学部の林衛先生よりコメントをいただきました。

スマートサバイバープロジェクト 西條剛央

小さな命の意味を考える会 佐藤敏郎

東京大学 纐纈一起教授

富山大学 林衛准教授

※団体名・所属・肩書きは当時

宮城県石巻市立大川小学校 校歌「未来をひらく」

作詞　富田 博　　作曲　曽我 道雄

一.

風かおる　北上川の
青い空　ふるさとの空
さくら咲く　日本の子ども
胸をはれ　大川小学生
みがく知恵　明るい心
くちびるに　歌ひびかせて
われらいま　きょうの日の
歴史を　刻む

二.

船がゆく　太平洋の
青い波　寄せてくる波
手をつなぎ　世界の友と
輪をつくれ　大川小学生
はげむわざ　鍛えるからだ
心に太陽　かがやかせ
われらこそ　あたらしい
未来を　ひらく

こちらから聞くことができます

語り部ガイドと勉強会・座談会のご案内

震災遺構大川小学校はいつでも見学していただけます。
大川伝承の会主催の「語り部ガイド」は、1～2カ月に一度、定期的に実施しています。また、勉強会・座談会も不定期に開催しています。どちらも、Facebookで開催日などをご案内していますので、ご興味ある方はこちらをご確認ください。

小さな命の意味を考える会
Facebook
www.facebook.com/chiisana311

大川伝承の会
Facebook
www.facebook.com/ookawadensyo

ご支援のお願い

小さな命の意味を考える会の活動を広め、サポートするために、スマートサプライビジョンでは、みなさまからのご支援をお願いしております（1口200円～）。ご寄附は、本冊子の印刷費、制作費、発送諸費用や、講演等で全国に講師を派遣する際の費用補助などに、大切に使わせていただきます。

■小さな命の意味を考える会をスマートサプライで支援するには
WEBサイト　smart-supply.org/#/ssv

■口座へのお振込は
ゆうちょ銀行　九〇八店　普5636292
一般社団法人Smart Supply Vision　シャ）スマートサプライビジョン
※お振込み名義の前に「ちいさな」と入れてくださいますようお願いいたします。

■お問い合わせは　info@smart-supply.org

小さな命の意味を考える　第2集 宮城県石巻市立大川小学校から未来へ

2019年 6月10日　第1版第1刷発行
2024年 2月20日　第6版第2刷発行

編集・発行 ● 小さな命の意味を考える会／大川伝承の会／一般社団法人Smart Supply Vision

表紙イラスト ● 斉藤 みお　　編集協力・デザイン ● 三富 とくほ

小さな命の意味を考える会
代表：佐藤 敏郎
E-mail：311chiisanainochi@gmail.com
311chiisanainochi.org　www.facebook.com/chiisana311

大川伝承の会
代表：鈴木典之　佐藤敏郎
E-mail：okawa.densho@gmail.com
www.facebook.com/ookawadensyo

一般社団法人Smart Supply Vision（通称：スマートサプライビジョン、略称：SSV）
代表理事：矢﨑 淳一
〒107-0062 東京都港区南青山2丁目2番15号 ウィン青山942　TEL: 050-3699-6675
E-mail: info@smart-supply.org
smart-supply.org　www.facebook.com/smartsupplyvision

本冊子「小さな命の意味を考える　第2集」は、第1集とともに、たくさんの方のご支援・ご協力によって制作・発行いたしました。心から感謝申し上げます。

「小さな命の意味を考える　宮城県石巻市立大川小学校からのメッセージ」（第1集）、
「小さな命の意味を考える　第2集 宮城県石巻市立大川小学校から未来へ」（本冊子）の
PDF形式のデータは、以下のホームページアドレスからダウンロードしていただけます。

■スマートサプライビジョン　smart-supply.org/store